

古田武彦講演 一九九八年 十月四日(日) 午後二時より五時

於…大阪 豊中市立生活情報センター「くらしかん」

古代史再発見 独創古代 — 未来への視点

一 天の原・・・三笠の山に出でし月かも

天の原 ふりさけみれば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも

この歌は、百人一首にも出ているので日本人にとっては、非常に良く知られた阿部仲麻呂の歌でございます。

この歌をわたしは二十代半ば、大学を出てすぐの青年教師の頃松本深志高校の国語の授業でこれを扱った。教科書にこの歌があつて参考書かなにかで勉強して、いかにも知つてるような顔して、従来の定説どおりの解釈を話した。

阿部仲麻呂という人物が遣唐使で中国へ行つて、帰りがけに明州という中国の東海岸で船出するときに、別れの宴を催してもらつて、その時読んだ歌だ。

「天空を見上げて、振り返れば月が見える。我が故郷の大和の春日の三笠山にでた月だ。」とそういう解釈をした。

授業が終りカーンと鐘が鳴つて、廊下へ出てくるとバラバラッと生徒たちに取り巻かれた。

(生徒) 先生、今日の詩について、質問していいかね

(古田) ああいいよ

(生徒) なんでみんな宴会の時、西向いとつたんかね

(古田) なんでそんなこと、ワシが言ったか?

(生徒) だって、「天の原を振返つてみたら」と訳した。

日本が見えるというんだから、日本は東にあるじやろ。

それまで皆西向いておらにやならんじやないか。

どうして宴会の席で、みんな西向いていたのかね。

この辺までは例によつて、生徒が若い先生にイチャモンをつけて、苛めていると。連中来たな！ こつちはそのくらいに思つて「負けんぞ」という気持ちでおつた。ところが最後の質問でトドメを刺された。

(別の生徒) 先生、その春日ちゅうのは、中国でそんなに、有名なんかね

(古田) えっ！、どうして

(別の生徒) だって、大和なる三笠の山と、どうして言わんの

だい。大和なら中国でもみんな知つている地名だろ。

春日というのは大和の中の小さい地名だろ。春日つて

中国ではみんな知つているのかい。

この質問には、ぎっくり首を斬られた感じがした。生徒には「次の時間までに考えてくるから」とその場をおさめた。でもね、私はこのときは、「まだまだ。」と内心は思つていた。その時は新米の教師で、初めは社会科で一年やつてから、校長から「国語に変わらんか」

と言われて変わったが、国語はぜんぜん知らなかった。でも土俵を割ったつもりじゃなかった。職員室へ帰れば、活きた虎の巻がいた。石上順さん・国学院出身で折口信夫（釈超空）先生の直弟子で、その時四十歳代。先生の伝記にも名が出てくる・・というベテランの先生が隣の机にいられた。その先生に聞けばなんでも教えてくれた。帰ってその先生に「どうでしょうか」と聞くと、ニヤニヤ笑って「ウーン連中、いいところを突くねエ」。何も教えてくれない。つまり国語の古文の辞書まで作られた石上さんの目にも解説できなかった。

わたしは次の時間にも「わからん」と言わざるを得なかったんです。

これが解けたのは、質問を受けてから二十五年も経って、古代史の世界に入って対馬に船で行った時です。博多から壱岐を通って対馬へ船で向かったとき、あるところで西に向きを変える。博多からずーつと行きますと、対馬の西側浅茅湾あそへ入るには、大きい船は壱岐の北東側をまわって、その水道で、西に向きを変えるのがスムーズなんです。

船のデッキに出ている、西むぎの水道に入ったときに博多方面を観ていた。たまたま目の前に壱岐の島があり、船員さんに「ここはどこですか」と壱岐の地名を聞いたら、「天の原です。」と言われて、ギョツとした。こんなところに「天の原」がある。確かに考古学的には壱岐に天の原遺跡があり、銅矛が三本出土したことぐらいは知らないではなかったが、その遺跡がどこにあるかは、確かめたことはなかった。ところが目の前というか目の下に、曲がり角のところに「天の原」があった。忘れていなかったのでしょう。二十五年前の授業と生徒のことを思い出した。

そのときは、もう九州の「春日と三笠山」については、一応知っていた。旧制広島高校時代の無二の親友といつてもよい友人が九州春日市にいた。その家に泊めてもらって、福岡・博多湾岸を歩き回った経験がある。だから一応地理は知っていた。春日市、今は博多のベッドタウンですが、昔は太宰府のベッドタウンだったでしょうね。それで現在名は宝満山ほうまんざん。仏教的な命名で後で付けられた名前。ほんらいは御笠山という山がある。ここの御笠山は、御笠川が博多湾に流れていて、御笠郡がある。そういうことは知ってはいたが、奈良と似たようなセットになった地名があるのだなあ、というぐらいいだった。阿倍仲麻呂と結びつくとは思いませんでした。

ところが、「天の原」があり、船のデッキから見ると、ドンピシャり見えるというわけではないが、大体あの辺りが御笠山となる。しかも後で知ったことですが、ふりかえって見ると、目の前に御笠の山が二つある。金印の出た志賀島。そこにもそんなに高くはないが御笠山あり、他方は宝満山とよばれる御笠山がある。「筑紫なる三笠の山」と言えば、どちらか分からない。ここでは宝満山を御笠山に特定するためには、「春日なる三笠の山」と呼ばなければならぬ。だから生徒から、「なぜ大和なる三笠の山といわんのだ。」と突っ込まれずむに済む。これで全部答えが出てしまった。これは偶然の一致とはいえないと、考え始めた。

資料例

續筑前国風土記

筑前之二十四（御笠郡四）

寶満明神ハ在リ御笠郡竈門山上（又名寶満山、又名御笠山）

偶然ですけれども、松本深志高校で私をいじめた、素晴らしいいじめですけれども、そのグループのボスの存在が北九州にいた。製鉄会社の子会社の社長になっていて、重厚な立派な紳士になっていた。二十五年ぶりに報告したら喜んでくれた。

その問題が、今日お話しする重大な問題に発展するとは思っていませんでした。

二 二つの三笠山

次に十月三日昨夜、奈良県奈良市に行つて、三笠山と月の関係を観測してまいりました。きちんと晴れまして朱雀門の所に陣取つて、十人ばかりで観測しました。一目瞭然^{りようぜん}。三笠の山は奈良では無理がある。

奈良市の中央、朱雀門から東を視ると、北寄りに若草山があり、その南に春日連峰が連なっている。春日連峰は花山、芳山、高円山などが連なっていますが、主峰が高円山^{たかまづやま}です。高円山に向かつてその左下に御蓋山^{みかさ}がある。若草山と御蓋山、この二つが三笠山と呼ばれている。

結局三笠山が二つある。これおかしいと思いませんか！。確かに地名もそうですが、山の名前も同じ音だったり、表記だったりするものが日本列島各地にある。これは別の国でもある。しかし同一地点からみて、同じ名前の山が二つある。そんなことがあると思いませんか。わたしは、そんなことは、ありえないと考える。第一不便でしようがない。名前を付ける意味がない。〇〇山と言っても、分からない。

結局資料を調べたり、朱雀門を長年管理しているおじいさんや、

平城宮跡博物館のボランティアの説明員のおじいさんなど地元の話の話を詳しく聞いた。それで分かったことは、現地で三笠山と言っているのは、低いほうの御蓋山^{みかさ}のことである。この山から月が出ると言つても、余り低すぎて説明が付かない。

(この山から月が出るのを観察できるのは、春日大社の境内だけである。)

それで結局、見えやすい若草山を、三段に見えるところがあるというので、江戸時代には人々が三笠山だと思ふようになった。

(この山から月が出るのを観察できるのは、奈良市のうんと北の方の丘というか古墳沿いである。)

二つ三笠山があると言っているが、現地読みの三笠山・若草山と、学説三笠山・御蓋山^{みかさ}がある。これが両方あるという意味である。

学説御笠山もこれで良いかというところ、そこから月が出るのは、見る角度や観る位置によつて、なかなか難しい。

昨日朱雀門から月を見たときは、だいたい高円山の東側から出て、とても三笠山から出たという感じがしない。だいたい春日連峰から出るとか、高円山から出ると言えよいが、「三笠山から月が出る。」という言い方は、全く言えなくはないでしょうが出来にくい。

写真家の入江氏が、撮った写真の中で、両脇に若草山と御蓋山がならび、春日連峰の若草山寄りに月が出ている貴重な写真がある。これはどこから撮った写真かというと、西の京の薬師寺辺りから撮った写真である。もう一つ御蓋山^{みかさ}から月が出ている貴重な写真を、「古田史学の会」の会員の方が、見つけて下さった。『歴史の舞台』という入江氏の写真集。ここには中央に御蓋山があつて、真上に月が出ている。じゃあ、この写真はどこから撮ったかというところ若草山からです。若草山の上に写真機を据え付けて、月と御蓋山を撮った写真である。たいへん苦勞し抜いて撮った写真である。

だから無理をして三笠山（御蓋山）から月が出る写真はあつたのですけれども、普通に奈良市内から見たのではどちらも当てはまらない。普通に「三笠の山・・・」から月が出るとは言いにくい。どう観ても春日連峰から月が出るという言い方なら問題がない。「・・・高円山に 出でし月かも」、「・・・春日の山に 出でし月かも」なら当てはまるが、どうも「・・・三笠の山に 出でし月かも」とは言えない。

もう一つ知ったことは、御蓋山が「神山」であるという興味深いお話を、平城宮跡博物館のボランティアの説明員の方から知ったことである。

春日大社の神山ですが、同時に春日大社以前の御神体の山です。「北の御蓋山（ミカサヤマ）、南の三輪山（ミワヤマ）」という南北に対する神様の山でした。」という興味深い貴重なお話を、ボランティアの方から繰り返しお聞きした。

私のほうの理解からすると『古事記』『日本書紀』の神話とは別世界の、それ以前の神話である。『古事記』『日本書紀』の神話は、御承知のように九州から来た三種の神器の信奉者が、大和に侵略してもたらした神話である。それでは侵入する以前は神話のない世界だったのかというと、そんなことはない。その前も神話があつた。

その一つの証拠が、天香具山の神話です。大和の風土記は断片しか残っていませんが、天が裂けて、一方が四国の石鎚山へ、墜ちてきた。他方が大和の天香具山へ墜ちてきた。そういう説話が残っていた。これは『古事記』『日本書紀』の神話ではない。だから『古事記』『日本書紀』とは、ぜんぜん別系列の神話で、北の三笠山、南の三輪山に神が降りてきたという神話である。その御神体を祭る神社があつて、その上と言うか後に春日大社が乗っかって祭られている。この辺の話も始めると面白いが、せつかく大和に帰ってき

たのだから大和の研究をしたいと思つた。天皇家以前の大和の歴史の研究です。

とにかく「歴史は足にて知るべきものなり。」ということ。私の尊敬する歴史家秋田孝季が言っていることを痛感した次第です。

このような新しい発見があつたので今日は赤いネクタイをして、喜びを表現しようと思つたが、帰って新聞で見ると犬養孝氏が亡くなつていたので普通の地味なネクタイにした。

さて昨日現地で確認したとおり、間違ひなくこの阿倍仲麻呂の歌は、奈良県の大和で詠んだ歌ではない。さきほど九州の御笠山。九州では、御笠山は海拔千メートル近くあり、高さがぜんぜん違う。奈良の三笠山は、三百メートル程度である。しかも（博多）海岸辺ですから、いつも雲が柵引いているようである。月が御笠山（宝満山）から毎日上がる。阿倍仲麻呂の歌は古今集ですが、万葉集の中に御笠山が出てくる歌がある。御笠山には朝出た雲が消えたかと思うと、又夕べの雲が柵引く。いつも雲が柵引いていて絶え間がない。それと同じように私の心にあなたの面影が、朝浮かべたかと思うと夕方また出てきて絶え間がない。あなたが従来は奈良の三笠山として扱っている。岩波古典体系系の注釈も、そうなっている。ところが奈良の三笠山は低すぎて朝も夕も雲が常にかかるという山ではない。ところがあの宝満山では、千メートル近くあり、海岸が近いので、いつも雲が柵引いている。私も三回登った。初めは晴れて幸運なことに博多湾岸が見渡せたが、後の二回は霞がかかっていて何も見えなかつた。見えないのが普通である。この歌の通りである。実はあの歌は、九州の御笠山が歌われていたのではないか。という問題があり、犬養孝氏にも、この歌の解釈を聞いていただきかけた。この歌だけなのかという問題もある。

三 九州何処所 九州いづれか所せし

さて、それでは次の詩にいききたいと思えます。この詩はどういう詩かというところ、阿部仲麻呂が唐の長安へ行きまして、やがて日本に帰ってくる。その時彼は中国で高位高官に出世して、唐では秘書官の長官になっていた。この時は作者の王維が目下で、外国人の阿部仲麻呂が上官だった。その送別の際に、詩を王維が作った。中国側の汲古閣刊本（図一）

極玄集卷之上

唐諫議大夫姚合選

王維

字摩詰河東人開元九年進士歷拾遺

御史天寶末給事中肅宗時尚書右丞

送晁監歸日本

積水不可極 積水きわむべからず

安知滄海東 いづくんぞ滄海の東を知らん

九州何処所 九州いづれか所せし

萬里若乘空 万里、空に乗ずるがごとし

向国唯看日 国に向かいて、ただ日を見る

帰帆但信風 帰帆ただ風にまかす

鰲身映天黒 鰲身、天に映じて黒く

魚眼射波紅 魚眼、波を射て紅なり

郷樹扶桑外 郷樹 扶桑の外

主人孤島中 主人 孤島の中

別離方異域 別離 まさに異域

音信若為通 音信 いかんか通せん

こういう詩である。問題は第三行目の、

「九州何処所九州いづれか所（ところ）せし」

（阿倍仲麻呂さん）あなたが帰ると言っている九州はどこにある。

そうするとこれは、日本列島全体を九州と言ったことは聞いたことはない、それで九州島となる。それに後の方に「主人孤島中」の句があり、「孤島」と書いてある。この場合「主人」というのは阿部仲麻呂。宴を催した側が主人、宴を催された側が客です。このような「主人」という語の用法は、王維の詩にたくさん出てきます。われわれは普通、送別会というのは、別れていく方の人が「客」で、送る方が「主人」というか会を催すけれども、当時は逆だった。おそらくご恩返しという意味で、「主人」として阿部仲麻呂が会を催して、お世話になった人を「客」として呼んだ。それで阿部仲麻呂が「主人」。ついで「主人孤島の中」の句があり、「孤島」は九州島となる。

ところが従来は、そう解釈されていなかった。有名な『唐詩選』などで出てくるばあいは、ここは変えられている。「九州何処所」が「九州何処遠」に変えられている。どこが変えられているかというところ、「所」が「遠」という字に変えられている。これを中国人の意味の取り方を考えると、「あなたの帰られる九州」というところは、どんな遠いところにあるのですか？という意味に取れなくはないが、中国人にとってふつうの九州。伝統的な中国の九州の考え方で、つまり中国本土の意味「禹貢九州」。「あなたが帰るところは、中国本土からのくらしい遠くはなれているところか？」と読みたい、：：：つらい読みですが、本当は「自（から）」を入れなければならないが、：：：なんとか読めないこともない。そう解釈するのか。それとも、もつと都合のよい解釈。『唐詩選』の解釈。全世界が九州に

別れている。・・・普通はそう解釈されていますが、司馬遷の『史記』の中で紹介されている陰陽家の説として否定的に紹介されている大風呂敷のような説がある。全世界九州で、その一部が中国（中心）であるという説・・・大風呂敷のような、超古代史の考え方のような、その立場に立つて理解する。「全世界の中で、あなたの帰るところは一番遠いところにある。」と解釈する。吉川幸次郎さんなども、そう解釈され、岩波文庫や他の詩集の解釈でも同じく全世界九州である。「遠」なら、未だなんとか、それで通用する。

しかし「九州何処所」となると、ちよつとそれは読めない。九州は主語ですから。「九州はどこにあるのか」という解釈にならざるを得ない。それでこれは「九州」島のことだと、なつてくる。これも調べてみると、「所」となっているのが『極玄集』。一番古い詩集である。これは九世紀、阿倍仲麻呂や王維がなくなつてから百年も経っていない時期に、姚合ようごうによつて編集された詩集である。彼自身は詩人でもあり、『唐詩選』の中に、彼の詩も二・三詩はある。その詩人の姚合が、八世紀以前の、七世紀ぐらいからの唐の初期の詩人の詩を編集したのが『極玄集』である。非常に古い。

その他の詩集たとえば『唐詩選』。明代の偽作というか、現代中国では相手にされていない詩集です。商人が学生に頼んで編集した詩集、それは悪くはないのですが、明代の有名な大家の編集と偽つて、「売らんかな。」で売り出した。後の人が調べてみると明代の大家の研究の記録が残っているが、全く『唐詩選』に関係した記録がない。それで中国では相手にされていない詩集です。

ところが日本では荻生徂徠という江戸時代の有名な大学者が注目して、中国の詩をまとめてあつて便利だということで大いに推奨

したので有名になった。敗戦後はご存知の吉川幸次郎さんが名訳の岩波新書の『新唐詩選』を出されて、更に人気が高まった。その『唐詩選』では、「所」が「遠」になつている。

では『極玄集』から直したのは、『唐詩選』が初めてかというところではなくて南宋あたりに直されている。南宋の最後『須溪先生校本・唐王右丞集』という版本では「遠」に直されている。須溪先生（劉辰翁）というのはすごい先生で、自分で自分のことを「須溪先生」という朱子学の学者である。・・・朱子学、これは現在でいえば中華思想原理主義みたいなもの、中国が一番偉い。・・・そういうイデオロギーを強烈に主張する。その立場で校本を作る。それに反するものは書き直す。ひどいんですけども。

中国でも唐は、外国人である阿部仲麻呂が高位高官の官僚になれたことでも分かるように国際的に懐のひろい国だった。南宋は元の圧力下にあつたので、今度は逆に中華思想を極端に強調する。そういう立場に立ちますので、「九州」という言葉自身が、中国以外で使われていること自身が、もう承知できない。それで「遠」に手直しする。

もう一つ、静嘉堂文庫本というものでは、北宋刊本の南宋再刻本ですが、「去」に手直してある。「去」に直しますと、「全世界の中でああなたはどこへ去つて行くか。」と、なんとなく読める。

ということ直しの入った後世の版本が、「遠」や「去」の字になつている。これに対して本来の一番古い版本では間違いなく「所」である。そういうことを京大人文科学研究所の『極元集』の版本を見つけて確認しました。すると、やはりこれは「九州」島のことである。そう考えざるを得ない。

では王維のこの詩の「九州」島は、変なことを言うのですが「帝国ホテル」とつぜん何を言うのかと思われるでしょうが、以前にある会の講師として韓国へ行つたときのことです。ある方が、通訳の方にこういう質問をされた。「朝鮮日報はなぜ韓国日報としないのですか。あれは、おかしいのではないか。」と質問された。ソウルで「朝鮮日報」という新聞が売られているのを見て、おかしいと思つた一行の方が質問されたのですが、相手の通訳の方の返事が見事でした。「どうしてですか。東京にも帝国ホテルがあるじゃないですか」。側で聞いていて、「やったな。」と思つた。聞いた方がギャフン、分かりましたという態度だった。帝国ホテルという名は、昔日本が大日本帝国と言つていたことの時代の証言者である。そうかといって現在東京にあるそのホテルを、帝国主義者ばかりが利用しているわけではない。ただ戦前(第二次世界大戦前)の名前が残っているだけである。それと同じだ。今韓国と言っているが昔朝鮮と言つただから、その名残の新聞名である。それだけの事を「帝国ホテル」というこの一言で表現している。

このばあいも八世紀半ばの阿部仲麻呂が「九州」島と言わなければ、相手が「九州」島というはずがない。今の阿部仲麻呂が帰ると言つた時代には、もう地名の「九州」になつている。唐は地名としての「九州」を許す雰囲気の国だった。ところが後の中華原理主義のはびこる世の中になると、九州を「中国本土」の意味に解釈してしまつて、いろいろ改竄かいざんを加えている。歴史的な意味は變つていくこともつけ加えさせていただきます。

そうすると阿部仲麻呂は、「私はこれから九州へ帰る。」と言つていた。九州島、そこに帰ると言つていくことになるわけですよ。『阿部仲麻呂伝』なんて千ページ近いデカイ本が出ているが、読んでみて阿部仲麻呂が奈良の出身である証拠はこの歌しかない。

この歌が太宰府のある九州へ移れば、阿部仲麻呂は九州の出身となる。

ついでながら九州の方の御笠山は、太宰府から大体東にあつて、太宰府市を含む筑紫野市、大野城市辺りから月を覗けば大丈夫だ。春日市は逆に近すぎて半分ぐらいいは隠れる。これは、もう一度確認して頂いている。ようするに太宰府近辺から覗けば月が見える。

さてそこで、この問題は先ほど言いましたように、とんでもないところに飛び火というか影響を及ぼすことになつてまいりました。

阿倍仲麻呂の歌が掲載された『古今和歌集』から、同じ紀貫之が三十年後に作つた『土佐日記』では、この歌が冒頭が変えられて載つている。

『土佐日記』でこの歌を紹介するのですが、土佐から浪速に帰つてくる途中、

青海原 ふりさけみれば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも
 こういう形で紹介されている。

つまり最初の一句は変えられている。「天の原」を「青海原」と直されている。これは私が生徒にいじめられたと同じように、素晴らしいじめですが、紀貫之も朝廷の朱雀門の場で披露したとき、やはり皆からいろいろ言われたようです。それで部分改訂で「天の原」の部分で「青海原」と直した。中国明州で作つたなら目の前は「青海原」ですから。それで本質的な解決になつていないのは、先ほど言いましたように御承知の通りだ。我々のように奈良に行かなくとも常に奈良の方にいるので、三笠の山から月が出るとは言えないとか、色々言われたでしょう。紀貫之はいつもあの辺りに居たようであるから。それで部分改訂で「青海原」と改訂されている。

私自身は、この歌が『古今和歌集』と『土佐日記』の二つある。そういうことは最初から知ってはいたが、その持つていている意味をしつかり考えたことはなかった。

今考えてみると、わたしにはこの問題で二つの教訓を得ることができた。

一つは先ほどの問題で、紀貫之は『土佐日記』のなかで、前後に解説を書いている。そのなかで「阿部仲麻呂が明州で別れの宴で作ったと語り伝える。」と書いている。これは間違いだ。ペケである。判断している。あの歌そのものは、吉岐から対馬へ往く時「天の原」で作った歌だと理解しなければならぬ。

つまり歌で信用できるのは、歌そのものである。歌は第一史料、直接史料。

前後の解説というのは、その歌集が出来たときの解釈。第二史料。もし解説が第一史料というなら、その歌集を作ったときの編集した人の考え方がどうであったかを示す第一史料である。少し段階が違う。

当たり前でしようけど、歌は第一史料、解釈は第二史料。当たり前でしようが、この方法論を再確認した。

第二番目には、歌を一部分改竄^{かいざん}することがある。改訂すること自体が考えられない。このこと自体が信じられなかった。現代で言えば齊藤茂吉の歌の一部分を、読者が勝手に少し流れが悪いからと判断して、その一部分を齊藤茂吉にことわり無く勝手に改訂し、出版するのと同じである。そんなことは今まで考えられなかった。それを実はやっている。善意でしようが「天の原」を「青海原」としたほうがよろしい。そんなばかな酷い^{ひど}というが、私たちもそれを余り笑えないかも知れない。勝手に三国志に「邪馬台国」と書いてある。そういう説と同じだ。あれも改竄^{かいざん}、改訂だ。勝手に学者がそ

う主張し、教科書にも書いてある。あれも似たようなものだ。善意でしようが「天の原」を「青海原」としたほうがよろしいと考えて、改竄^{かいざん}、改訂してある。直しを入れている。そういうことを知ることが出来た。そのことが次の大きな問題につながって影響してきました。

四 「君が代」か、「我が君」か

『古今和歌集』の巻七の先頭にあまりにも有名な歌があります。

わがきみは 千代に八千代に さざれいしの いわおとなりて

こけのむすまで

これが有名な「君が代」に当たります。

ところが、まず「君が代」とはどういうものか。わたし共の解釈をご存知でない方がおられると思いますので、ひとこと述べさせて頂きます。

九州糸島・博多湾岸、その対岸に金印が出た志賀島があります。そこに志賀海神社という神社があります。そこに「山誉め祭」というお祭が年に二回（四月・十一月）行われます。「山誉め祭」はいろいろな祭を、時代別に重箱のように詰め込んだおもしろいお祭りですが、その最後に「君が代」が出てくる。村人の方々、漁民が多いと思いますが祢宜（ネギ）となつて、このドラマというか劇を演ずる。向かつて右側に神主さんが座っているが、神主さんは何も演ずらない。ただ黙って見ているだけ。発言も一切何もしない。やるのはもつぱら祢宜さん達、村人たち。セリフもみんな決まっている。

ある人が「七日夜と・・・」と発言すると、別の人が、「やや！。あそこにお出でになさるのは、我君なるぞや。」とつぶやくように言う。そして別の人が「君が代は 千代に八千代に さざれいしのいわおとなりて こけのむすまで、あれはや あれこそは 我君の めしの みふねかや・・・」と言う。櫓を執つて行かう。後は省略。これは我々の知っている「君が代」のリズムとは関係ない。朗々とつぶやく。言い方は変ですが、朗々とセリフを語る。そういうお祭りである。

君が代は 千代にやちよに さざれいしの いはおとなりて

こけのむすまで

一方で、セリフの中には、我君は七日夜に、お出でになる。対岸の千代からお出でになるという設定です。千代というと県庁前（近辺）対岸。八千代という、それを広くして博多湾全体を指す。それから今度は糸島に入りますと、細石神社、三雲遺跡の直ぐ裏。井原・三雲遺跡という三種の神器の宝庫ですが。それからその神社の南隣にあるのが井原（いώρα）遺跡。私は井原（いはら）だと思っていたのですが、土地の人に違々と教えられて、井原（岩羅 いώρα）だと分かった。もう一つ言いますと背振山脈の第一峯が井原山、第二峯が雷山。そこに見事な鍾乳洞があります。「いわを（岩尾）」はおそらく、その井原山の尾にあたると思うのですが。それから更に細石神社から西に行きますと、唐津湾の近く桜谷若宮神社。ここの祭神が、なんと苔牟須売（こけむすめ）姫神。以上列記したように、千代から地名や神名が連なっている。「君が代」は博多近辺の地名・神名を綴りあわせてある。そして最後が苔牟須売姫神という祭神で終わっている歌である。これが偶然の一致とは考えられない。

まとめの再掲載

ちよー 福岡県福岡市県庁前。千代の松原（千代東公園）、

千代町、千代県庁口（地下鉄駅名）。千代は現在の千代町。広げて言っても、その前の海岸である千代の松原。

やちよー（博多湾）八千代という、それを広くして、

おそらく博多湾全体

さざれいしー 細石神社、三雲遺跡の直ぐ裏 福岡県前原市、細

石は神聖な石。

いわおー 岩尾 細石神社南隣に井原遺跡がある。井原山の尾に

当たる所 井原（岩羅 いώρα）など、福岡県前原市

背振山脈の第一峰が井原山、第二峰が雷山。ここは見事

な鍾乳洞がある。

こけむすー 苔牟須売姫神 桜谷若宮神社の祭神 福岡県糸島郡

（唐津湾）

博多でシンポジウムがあつたとき、その前日に以上の地名群があることを現地で調査していた。そう言っていたら、古賀さん（現古田史学の会事務局長）が、志賀島の志賀海神社の年に二回ある「山誉め祭」というお祭りに、地唄として「君が代」が述べられていることを知らせに来て頂いた。そういう劇的なドラマにより、劇的に「君が代」の理解が前進した。以上のエピソードを含めた問題は、本で紹介されています。

とにかく今のように博多湾岸の地名、神名がずっと連なっている。志賀島の志賀海神社の年に二回ある「山誉め祭」というお祭りに、地唄として「君が代」が述べられている。これが偶然の一致と言えるはずがない。

以上のわたしどもが「君が代」に対する一応の態度をまとめた『君が代は九州王朝の賛歌』（新泉社）で、示したわたしども以前の解釈である。ですからわたしどもの本を以前からお読みの方は、ご存知のことからです。

ところが先ほどの阿倍仲麻呂の「天の原・・・」の歌が、『古今和歌集』では「天の原」が、紀貫之の『土佐日記』では「青海原」に改竄かいざんされている。善意ですが改竄かいざんされている。この論理を押し進めることにより、「君が代」の理解がさらに前進した。

『古今和歌集』をもう一度見て下さい。ここでは、「君が代」となっていない。ここでは全て「わが君は」となっている。第一句が違っています。後は同じです。

わが君は 千代にやちよに さざれいしの いはほとなりて

こけのむすまで

十世紀始めの『古今和歌集』では、どの版本をとつても「わが君は」となっている。「君が代」と成っている版本は一切ない。そして今まで、百年後に作られた十一世紀初めの『和漢朗詠集』から「君が代」となっていると理解していた。――山田孝雄よしお氏という有名な言語学者の調べたもの、たとえば『君が代の歴史』（宝文館刊）でも紹介されております。『古今和歌集』は全て「わが君は」である。――ところが今回さらに確認してみますと、岩波古典文学大系『和漢朗詠集』の祝いのところを見ますと、ここでも全て「わが君は」となっています。

ただ『和漢朗詠集』の流布本から、――流布本というのはもつと後に世間に売りやすいように、唐の『唐詩選』のように、一般の通

俗本として編集され直したのから、――初めて「君が代」となっている。つまり二百年経った作り直した流布本で、初めて「君が代」となっている。

となると、同一人ですけれども、紀貫之が編集した『古今和歌集』では「天の原」、三十年後の『土佐日記』では「青海原」となっている。善意でしょうが改竄かいざんというか、書き直していると判断しました。それ以上に、『古今和歌集』・『和漢朗詠集』では「わが君は」、二百年経った『和漢朗詠集』の流布本で初めて「君が代」がやつと出てくる。そうすると「わが君は」が本来の形であり、「君が代」が、改竄かいざん形というか、書き直しである。こう考えざるを得ない。今考えたらあたりまえで、もつと早くなぜ考えなかつたのか。自分の頭の固いのを嘆くほかない。

しかも先ほどの志賀海神社の「山ほめ祭り」でも「君が代」となっている。ところがよく詠むと、すぐ後のセリフが「あれはや あれこそは 我君の めしの みふねかや・・・」と書いてあり、「我君」と言っている。そうすると「わが君は 千代にやちよに・・・」の方が、きちんとセリフにあう。ここも本来は「わが君は」である。改めて気が付いて驚いている。そうすると、まず間違いなく「君が代」は後世の改訂・書き直し文ということになり、本来の伝えてきた姿は「わが君は」である。こう考えてまず間違いがない。

我が君は 千代にやちよに さざれいしの いはほとなりて

こけのむすまで

そうなりますと、この歌の性格がより明瞭になる。「我が君は……」となると、当然詠っている人も特定の人物ですが、「我が君」と詠われている人も特定の人物です。「君が代」でも大意は似たようなものであるが、「君が代は」より、もつと明確に「対一」というか、「A」という作者が、その主君であるBに対して作った歌である。」という性格がはつきりする。ですから、それが本来である。

そうするとおかしなのは、『古今和歌集』の書き方がおかしい。ここでは「題知らず、読人知らず」となっている。明らかにこの歌が、Bという特定の作者（臣下）が、特定の主君Aに対して作った歌であることが明らかであるにも関わらず、「誰が作ったか知らんよ。どの天皇に対してか、知らんよ。」という注釈。そんなはずはない。「君が代は」でも、そんなはずはないが、「わが君は」となれば、いよいよもつて、そんなはずがない。

だから「読人知らず」には二種類あるという有名な話がある。有名な平薩摩守忠度の例である。討ち取られるまえに、歌を勅撰集に載せると約束した。だから約束通り入れた。しかし「詠み人知らず」として載せたという有名な話がある。平家の討ち取られた逆賊だから、「詠み人知らず」として入れた。（平家物語巻第七）

本当に知らないから「詠み人知らず」に入れた例もあるが、知っていたから「詠み人知らず」にしたものもある。

これなども「わが君は」の歌は、作者をぜったい知っていたと思う。知っていたから載せない。神官の名前を知っていたから「題知らず。読人知らず」にした。ということはこの歌は、天皇家の歌ではない。この歌は九州王朝、筑紫の君に対して詠んだ歌である。そういうことを知っていたからカットした。

さてそうなりますと、その意味を考える場合、そういう考えから視ると、私も『君が代』は九州王朝の讚歌』（古田武彦他）で

あいまいにした、他方現地の志賀島の「山ほめ祭り」というお祭りもある段階で「君が代」になった。あいまいになった。しかし特定の人物に対して詠んだものであるとなると、そこで元の形の意味はどうか。もう一回考え直してみた。

この「我が君は」、博多湾岸あえて特定すれば県庁の千代辺りに住んでいる。そしてこの人物は、どうも体の調子が悪い、極端にいうと胆石とか目を病んでいる。病気を持っている。あるいは少なくとも老齢になっている。

それで『古今和歌集』の歌に戻り、三四三「わがきみは……」と、三四七迄の歌群と三四七「わがよはひ……」という一連の歌を見てください。

古今和歌集巻七

賀哥（がのうた）

題知らず

読人知らず

3 4 3 わがきみは 千代にやちよに さゞれいしの

いはほとなりて こけのむすまで

3 4 4 わたつみの はまのまさごをかぞえつゝ

君が ちとせの ありかずにせん

3 4 5 しほの山 さしでのいそに すむ千鳥

きみが みよをば ちよぞとなく

346 わがよはひ きみがやちよに とりそへて

とゞめをきてば 思ひでにせよ

仁和の御時僧正遍昭に七十の賀たまひける時の御哥

347 かくしつゝ とにもかくにも ながらへて

君がやちよに あふよしも哉かな

と言いますのは、三四七「わがよはひ・・・」という歌があります。見ますと「仁和の御時」とあるが、光孝天皇の時。この歌は光孝天皇が作った歌。光孝天皇のほうは若い。作られたほうの僧正遍昭は七十歳、私は七十二才で僧正遍昭より年上ですが当時としては、かなり老齢である。

僧正遍昭、この人は大分調子が悪い。寝たきりで。そのまま良いから、とにもかくにも命だけ生き長らえて欲しい。そして、あなたが八千代になつた姿を私は見たい。頑張つて下さい。そう解釈できる。つまり老齢であり、かつ動けない。植物人間とまではいきませんが、かなり寝たきりになっている。そういう人に対して、元気に活躍出来なくとも良いから、とにかく八十になつた姿を見たい、と言っている。「頑張つて下さい。」という、ねぎらいでもあり激励の歌である。

そういう歌から、さきほどの「君が代」の原形、歌三四三「わが君は・・・」を考えてみたら、この歌は変な歌である。そうは思いませんでしたか。よく考えてみたら変な歌である。

なぜなら「わが君」は一人の人間ですから、当然有限な人間です。誕生する時があり、死ぬときがある人間に決まっています。そういう前提で、歌は始まりながら、「千代に八千代と・・・こけのむすまで」と言っている。無限を願っている。十代の青年や二十代の

若者にも「千代に八千代と・・・」と言つても悪くはないが、余りふさわしくない。ふさわしいのは御本人は老齢である。そう長くは生きられない。かつ病気になるって動けない。いつ亡くなつても不思議ではない。そういう条件に置いて、「いや、あなたは永遠に生きていて下さい。」と。そういう場面に、この歌は非常にふさわしいと思いませんか。有限であるから無限を望んでいる。そう理解すると、わたし自身は一番この歌に納得できる。

そうなりますと更に考えを進めてみると、なぜこの歌は博多近辺の地名・神名を綴り合わせてあるのか。という問題になってくる。「千代から・・・こけのむす」までに到るのかという問題に行き着く。苔牟須売姫神という神様は、皆さん聞いたことがないはずである。なぜかというところ『古事記』『日本書紀』には出てこない。それで雄大な玄界灘望んで、芥屋けやの大門おおとという非常に有名な海の洞窟がある。それのお向かいさんに、唐津湾に望む福岡県糸島桜谷若宮神社に、苔牟須売姫神は祭られている。

ところで苔牟須売姫神をこのように考えることが出来る。

苔牟須壳姫神 こけむすめのひめかみ

こー 接頭語 「越(こし)の国」などの「こ」

けー 芥屋(げや)、もののけ(物の怪)と同じ「げ」である。

こけー 地名。植物の苔(こけ)は当て字である。芥屋(げや)の大門(おおと)という非常に雄大な玄界灘に向かっている海の洞窟がある。「げや」に対する、それと対を成す「こけ」と呼ばれる地帯、地名だと思う。

むー 牟 主たる、主人公という意味

すー 須 鳥の巣、本来人間の住むところも「す」です。鳥栖という地名がある。「住む。」と動詞もある。

むすー 人が住む主たる場所、大集落や中心地を指すと考えます。

めー 壳 当然女神、女神中心は縄文の神である。

「こけ」という場所に住んで居られる主なる女神、そう考えた。「こけ」は地名である。縄文はご存じのように、土偶を見てもオツパイがあり、女性中心である。ここでも縄文の女神であると考えています。

ご存じのように天孫降臨という名の侵略・侵入。天(海部)族が、わたしは壱岐・対馬だと考えるが、稲作の中心地・博多湾岸に侵入というか、征服した。その人々の神々は天神、天満宮の天神。侵入した方の神々。それに対し侵入された方の神々はすでに縄文からいた。その中の一人の女神である。侵入いぜんの神々の一人である。

(さきほどお話したように、近畿大和平野では南の天香具山、北の御蓋山という山に神々が下りてくる話は、『古事記』『日本書紀』にない。神武東征以前の前から居た神々であり、神話と考えています。)

さらに想像をたくましくすれば、現在ここは唐津湾の入り口である。弥生・縄文時代は唐津湾が中心部まで入り込んでいた。高祖山連峰の辺りまで、湾が入り込んでいた事が知られている。そうすると、この神様はいよいよ入り口にある。元はそういう意味で、入り口の航海安全の神様である可能性がある。その神様に、わが君の寿命を延ばそうと祈願を込めている。老齢になつて、いつ死んでもおかしくないわが君の寿命を延ばそうと祈願している歌で、祈願をこめる道中双六というか、道筋を読み込んでいる。到着点は苔牟須壳姫神。

それでは、なぜ苔牟須壳姫神なのかは深くは分からない。しかし考えてみたら縄文の多神教の神々のばあいには得手がある。どこへお詣りすればよいのが、決まっているのでないか。靖国神社に痔を治そうとして、お願いには行かない。咳が出て困るから明治神宮に行つて直そうと祈願する人は、あまりいません。やはり痔を治すのはこの神様、咳を直すのはこの神様と、庶民の中で評価は決まっている。ですから余命幾ばくも無いときに、天照大神に頼みにいくとか、天満宮に頼みに行つても駄目です。やはり寿命を延ばして頂こうと考えたときは、やはり古き縄文のこの女神に頼みに行つて寿命を延ばして貰う。そういう事が伝わっていたのではないか。そういう構造である。『古事記』・『日本書紀』の世界以前の、古い縄文の世界を前提にしないと問題は理解できない。

なによりも七〇一年以前は、日本国の前に倭国があつて、志賀島の金印以前の倭国(九州王朝)である。奈良県の近畿天皇家はその王朝の分派である。その歴史を抜きにして、「君が代」は理解できないという事である。出来るなら説明して頂きたい。私も『君が代』は九州王朝の讚歌(古田武彦他)という本で、一応の理解を得たと考えていたが、そんなことはなかった。なんの、なんの。

前半部だけだった。後半部は今の問題である。

この問題はまだまだ発展がある。なぜあるかということ、それはこけむすめ苔牟須売姫神はどういう神々の一端であるかということである。縄文の神々は多神教であるから、その研究をおこなわないと本当のこけむすめ苔牟須売姫神、縄文の神々の理解には本物にならない。これで次の研究の出発点にようやく、たどり着いたところだと。こう思っております。

五 釈迦三尊の光背銘

『法隆寺の中の九州王朝』（古代は輝いていた³ 朝日文庫 参照）後半の最初に述べさせていたのは、ごぞんじ法隆寺のご本尊である釈迦三尊の後ろの銘板でございます。黒く真四角なコピーです。この銘板は、聖徳太子とそのお妃、そしてお母さんが亡くなったときに作られた銘板だという説、法隆寺の中での解説はもちろんそうなっています。また学者のなかでも、わたし以外の学者もぜんぶそう言っている。しかしわたしは、これをどう見てもおかしいと考えています。

それは最近韓国へ行きまして、百済の武寧王陵へ行きその石碑の銘文を見ました。これ自身でもいろいろ発見がありましたが、今回あらためて思い起こして、釈迦三尊の銘板を見直して見ました。この銘板は日本では、最初と言って良い時期の七世紀前半の金石文ですから歴史研究の原点となります。文字自身なら先ほどの志賀島の金印がひじょうに早いですが、日本側で作られてものとしては、早い段階のものとして貴重なものであることは疑いない。

釈迦三尊の光背銘 原文

法興元卅一年歲次辛巳十二月鬼
前太后崩明年正月廿二日上宮法
皇枕病弗愈干食王后仍以勞疾並
著於床時王后王子等及與諸臣深
懷愁毒共相發願

仰依三寶當造釋

像尺寸王身蒙此願力轉病延壽安
住世間若是定業以背世者往登淨
土早昇妙果

二月廿一日癸酉王后

即世翌日法皇登遐癸未年三月中
如願敬造釋迦尊像并侍及莊嚴
具竟

乘斯微福信道知識現在安穩
出生入死隨奉三主紹隆三寶遂共
彼岸普遍六道法界含識得脫苦緣
同趣菩提

使司馬鞍首止利仏師造

〔『飛鳥・白鳳の在銘金銅仏』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編による〕

対比するためにずらしてあります。

まず内容を読みますと、

1 法興元三十一年歳次辛巳十二月鬼前太后崩

法興元三十一年、歳次辛巳十二月、鬼前太后崩す。

2 明年正月二日上宮法皇枕弗病恚(干食)

同年正月二十二日上宮法皇、枕病し恚^{よか}らず。

(食を干かす。)(喉に食が通らず)

3 干食王后仍以勞疾並

干食王后仍りて以つて深く勞疾し、並びに、床に著く。
(こう読んで良いか論じますが、従来はこのように読みます。)

4 時王后王子等及與諸臣深懷愁毒共相發願。

時に王后王子等及び、諸臣と与^{とも}に深く愁毒を懷き、
共に相發願す。

5 略(当時の決まり文句なので、四字十句省略)

6 二月二一日癸酉王后即世

二月二十一日癸酉王后、即世す(死去する)

7 翌日法皇登遐

翌日、法皇登遐す。

(上宮法皇死去する。身分によって使い分ける。)

8 癸未年三月中如願敬造釈迦尊像并使侍及莊嚴具竟

癸未年、三月中、願の如く、釈迦尊像並びに、

使侍及び莊嚴の具を敬造し竟^{おわ}る

9 略(四字十一句)

使司馬・鞍首・止利仏師造る。

(読み解説)

法興元三十一年十二月鬼前太后が崩す。「崩」は亡くなること。

周代は天子を王と言いましたから天子のお母さんを「太后」と言います。同じく天子の妃を「王后」と言います。正月二十二日上宮法皇、枕病して恚^{よか}らず。母親が亡くなってその一ヶ月足らずで看病していた上宮法皇も(干食 喉に食が通らず)病気に成って調子が良くない。この解釈のほうが良いと思います。(干食)王后よりて以つて深く勞疾し、並びに床に著く。(干食)王后と読んで良いかは別に論じ、一応そう読みまして看病していた(干食)王后も疲れはてて寝たきりになる。同二月二十一日看病していた王后が先に亡くなる。「即世」は亡くなること。亡くなった翌日、その看病されていた上宮法皇も亡くなる。「登遐」も亡くなること。身分によって使い分けていますが「即世」と「登遐」の実は同じ、死んだことです。三月中、發願の如く釈迦尊像及び莊嚴の具を備え終わる。もちろん天子や王后が死んだわけですから王子や諸臣が作った。

(吉祥文句である四字十一句は省略)

仏像は止利(しり、あるいはとり)仏師が造った。

この銘板を、従来はどう解釈しているか。言いますと厩戸豊聰耳皇子と『日本書紀』に書いてある。それで上宮法皇が聖德太子(豊聰耳法王大王)、穴穂部間人皇女が、用明天皇の皇后で、聖德太子のお母さん。これが鬼前太后である。それで、推古二十九年二月五日聖德太子が、『日本書紀』推古紀では亡くなっている。太后というのは、中国では天子の妻のことです。周代で天子を王と言ったので、それで天子の妻を王后という。あるいは菟道貝鮪皇女が干食王后である。

ところが内容を見ますと問題は、この銘板が聖徳太子に関するものと考えた場合、一番おかしいのは推古天皇（豊御食炊屋姫天皇）が出てこない。登場するのは、上宮法皇（聖徳太子）御本人、「鬼前（ぎぜん）太后」というのは聖徳太子のお母さん、次が「干食王后」ですが「干食」を切り放して別の読みを考え「王后」とだけ読むほうが良いと考えますが。とにかく「干食」を入れて読んでみても、具体的に登場するのはこの三名、「上宮法皇」、「鬼前太后」、「干食王后」である。

肝心の上宮法皇の時の天皇である推古天皇がまったく姿を現わさない。そんなことがあるんですか。法隆寺は官寺ではなく私寺だから、別に推古天皇が出てこなくともよいと言われた方がいる。わたしと論争した家永三郎さんもそう言っているが、私寺だから天皇のことはカットしても良いとは言えない。大和のど真ん中では考えられない。それで私寺だからと言ってみても、天皇というだけでなくプライベートに言っても、推古天皇は聖徳太子の四人いる奥さんの正妃のお母さん、中心の奥さん、正妃である菟道貝鮪皇女のお母さん。お父さんが敏達天皇。お母さんが推古天皇。関係ないよとは言えない。常識的に私寺であっても推古天皇は関係ないよとは言えない。入れないほうが不自然。わたしは、そのように考える。これにたいして、だれも答えてくれない。わたしの古代史における大きな論争は、三例ばかりあるが、榎木一雄さん、三木太郎さん、家永三郎さん、いろいろ論争したが、答ええないから、それで良いというわけではない。家永三郎さんとは、市民の古代別巻にあるように往復書簡として「聖徳太子」論争、「法隆寺」論争を行ったが、それなりに意味のある論争とします。この場合も一生懸命論争したけれども、お答えはなかった。答ええないから、それで良いというわけではない。今回読みなおし考え直して

みても、推古天皇が出てこないのは、やはりおかしい。

次の問題は上宮法皇の「法皇」とは、明らかに仏教の僧籍に入つた天子の意味である。この人は、明らかに自分は天子である。仏教の僧籍に入つてはいるが、いぜん天子である。聖徳太子が、「自分は天子である。」と、そのようなことを言うのでしょうか。聖徳太子はとんでもない人だ。摂政でかつ太子でありながら、推古天皇という奥さんのお母さん押しつけて、天子と名乗つた。そんなことを言えば、聖徳太子は経歴詐称となる。とんでもない人物だとなりませんか。私にはそうなると思います。「太后」は天子のお母さん。「王后」は天子の奥さん。中国の漢文としては、それしかない。

それから「三者鼎亡問題」と今回新たに名付けましたが、もし「上宮法皇」が聖徳太子とすれば、まず聖徳太子のお母さんが亡くなり、翌年御本人が病気になるって、次に看病していた奥さんが亡くなった。そして翌日に御本人が亡くなった。これは大変な事件である。

この大変な事件が、『日本書紀推古紀』には何も書いていない。『推古紀』には、聖徳太子のことがいっぱい出ています。死んだことも出ている。死んだこと自体も『推古紀』に出ています。しかし今言つたドラマチックな出来事が、その悲劇的な事件が、『日本書紀』にはその気もない。『日本書紀』に書くのを忘れたのですか。この事件は『日本書紀』を書いた時から百年も経っていない。『日本書紀』を書いたご本人は知らなくても、関係者のお爺さんやお婆さんはこの時期の一人ですよ。こんなドラマチックな話を知らないはずがない。しかし『日本書紀』にはその気もない。率直に言つて、マトモな神経では、おかしいと思わない方がおかしい。いや、かまわん。『日本書紀』は信用できないから、かまわんよ。」と言うほうが強引だ

と思います。しかし私以外の学者は、強引にみんなそう処理している。

これは家永三郎さんと論争した問題ですが、なによりも『日本書紀』には「天智九年法隆寺は一屋余さず焼けた。」と書いてある。法隆寺は焼けてしまっている。「一屋余さず。」という意味は、これは建物及び中の物が全部焼けたという意味であつて、本尊だけが残っているはずがない。本尊だけが残っているなら、「一屋余さず。されど本尊は無事。」そう書けばよい。書いても失礼ではない。書かずに「一屋余さず。」と書いてあることは、本尊も含め全部焼けたということです。

この「法隆寺は一屋余さず。」の問題は、別の観点から論争に決着が着いている。法隆寺は焼けて再建されたのか、あるいは焼けずに昔から今のままなのか、という法隆寺再建・非再建論争が戦前華やかに行われた。喜田貞吉、この人はなかなか気骨のある人で、再建説を唱えた。この再建説の理由は簡単。『日本書紀』に書いてある。焼けてもいないのに、書く理由はどこにもない。この事を何回も強調する。これに対して美術評論家や建築史家など多くの学者は非再建説。出来た当時のままだと主張した。『日本書紀』は信用できないという形で非再建説。しかしけつきよく発掘されると、前の遺構が出てきた。前の遺構と今の形は少しずれてはいるが、同じような遺構が出てきた。そういうことが分かって、喜田貞吉の見解が正しかった。喜田貞吉の根拠は『日本書紀』の「一屋余さず。」だけである。こういう経験がある。

今の私の場合、同じように本尊の存続問題。「一屋余さず。」と書いてあるのに、本尊があるということは、他から持ってきた。非常に簡単明瞭な論拠である。これに対して家永三郎さんからは、お寺は焼けたけれども本尊は焼けたとは書いていない。そういう感

じで反論された。わたしは、それでは反論になつていないと考える。

さらに「干食王后」については、やはりわたしは「干食王后」と読まずに、切り放して考え前の文章につなげ、「上宮法皇、枕病して愈らずして食を干かす」と考える。同じ意見の人ももちろんいる。これは「食物がのどに通らない。薬石甲斐なし。薬を用いても効果がない。」という意味に採るべきだ。中国にもそういう詩があり、それをバックにした文言であると論じた。)ですから、前につなげるほうがよい。(市民の古代別巻Ⅰ『聖徳太子論争』新泉社)

これについては百済の武寧王の銘板でも、武寧王(志摩王)のことは二重に固有名詞が書いてあるが、三年に志摩王が亡くなり、六年王の妃が亡くなったという記録がある。三年後亡くなった奥さんの実名がない。志摩王の表現だけしかない。これは我々の年代は、お手紙に奥様の名前を知つていても書かない。「○○さんの奥様と書くべきだ。」と教えられた。名前を知つていても書くのは失礼に当たるという考えを持っている。若い人は「そんな馬鹿な、奥様という名前はなし。名前は知つていれば書くべきだ。奥様は失礼だ。」と言うかもしれない。われわれの年代は、奥さんの名前は書かない。それと同じように百済の武寧王(志摩王)の銘板でも奥さんの名前が書いていない。他にも百済の銘文にも同じ例がある。だから釈迦三尊の銘板の場合も「干食王后」ではなく、「干食」は切つて前につなげ、「王后」だけで良いのではないか。

それというのも、解釈の中には「干食王后」は別の妃だという説もある。法隆寺の資料から、聖徳太子の奥さんは四人いる。(『日本書紀』は正妃だけ)。「干食王后」を、膳部加多夫古臣の娘である菩提々美郎女である考える説である。なぜ、そう言えるかという「干食」は食に関することだ。膳部(かしはでべ)も、御膳の「膳」で食に関することである。だから膳部(かしはでべ)出身の王后だと解釈する。

私はずいぶん強引な、こじつけた解釈であると思う。

聖徳太子の妃一覧

正妃 敏達天皇が父、推古天皇が母

菟道貝鮪皇女

父は蘇我馬子、子は山背大兄皇子

刀自古郎女

父は尾治王

位奈部橘王

父は膳部加多夫古臣

菩岐々美郎女

そういう解釈だと、具合が悪いのはお妃は四人もいるが、正妃の菟道貝鮪皇女がいるのに、ぜんぜん触れない。ノータッチ。それから当時勢力がいちばん強かったのは蘇我馬子です。その娘もカット。それに王子とあるが、山背大兄皇子はいは考えられない。そうすると山背大兄皇子が、この銘板を造つたはずだ。山背大兄皇子が作つたのなら、自分のお母さんもカットするのでしょうか。そして一番身分の低い膳部の娘だけを王后として書いたことになる。私の頭では付いていけない。有力な豪族の娘である尾治王の妃もカットする。なによりも「正妃」もカット。それでは山背大兄皇子の頭が少しおかしいと思う状況です。ところが、いまはそれが通っている。わたし以外の学者は、ぜんぶそのように解釈している。しかしこの学者の意見は、一般の常識のある人からみたら、この解釈で、なるほどとおもう人はいないと思う。

以上、いろいろ不審な理由を挙げましたが、そんなことを言わなくとも推古天皇が出てこない。この一言だけでも、おかしいと分かります。つぎに、三人がつぎつぎと亡くなった。このドラマチックな事件が、『日本書紀』推古紀に影も形もない。これをおかしいと思うのが常識です。おかしくないと言う人が、どんな弁明をしてみても苦し紛れとしか言えない。

しかし、これを聖徳太子ではないと言ってしまったら大変である。銘板が実在する。なによりも証拠の釈迦三尊が実在する。噂の話とか、写しが残っているという問題ではなく実在する。それでは金石文で実在したのは、「どこの王朝の誰のことか。」とならざるを得ない。

ところが、わたしのほうの理解であると、隋書の多利思北孤を上宮法皇と考える。この人物は隋に送った国書の中で仏教を尊崇し、中国の天子を「海西の菩薩天子」だと誉めてはいる。しかしこれは自分は「日の出づる所の菩薩天子」だと、暗に主張していることになる。単なる謙遜や人をほめていただけではない。とにかくそういう菩薩天子の立場をとった人物がいる。この隋書の人物は非常に銘板の人物とイメージが重なってくる。ですから「阿蘇山有り」の九州の「日の出づる所の天子」だとすると無理がない。

しかも「干食」とならんで、従来学者が解釈に悩んできた言葉がある。それは 鬼前太后の「鬼前（きぜん、おにのまえ）」である。これはどうみても太后にかかる「鬼前」である。今までの解釈は、どう解釈しても「こじつけ」に成ってしまう言葉である。落ちつきが悪い。ところが北部九州に、糸島に持つていけばどうなるか。

先ほど説明した桜谷神社。その右上。そこから車で行けば十分ぐらいで櫻井があり、鬼という地名があり、鬼ノ内という地名があり、そして鬼ノ前がある。こここの出身の人ならば、鬼前（おにのまえ）太后である。そのようなことは思いもしなかったが、このことは多元的古代九州の会の会員であった故鬼塚氏に教えていただいた。ご本人の名前も「鬼」が付いていて、教えられて現地に行きました。

それで補足しておきますが、その時は、鬼は先住民のことだと理解していたが、今のわたしの理解は違っている。鬼というのは、

尾丹（鬼 ヲニ）と考えます。尾（ヲ オ）は山の尾で、山の尾根の端。そういう地形だと解釈している。丹（ニ）は赤い土のことで、赤い土は貴重な物だった。朱はもつと大切だが、そればかり使うわけにはいかないから、赤い土をお墓に盛んに使っている。古墳時代になっても、朱は装飾古墳などに盛んに使っている。それが出る場所を、地形を含めて尾丹（鬼 おに）と言っていたのだろうと考えています。漢字表記を当てにすると具合が悪い。あれは後の当て字ですから。尾丹（ヲニ）というところとワ行とア行が交じっているが、この地名に關しては問題ないと考えます。とにかく現地を訪れて、もう一度調べ確認したい。

そのことはいちおう別にしても、そこが鬼ノ前であることは疑いがない。糸島鬼前（おにのまえ）出身の太后というか、九州の太后と考える。大太子を生むときは実家にかえって生む。そこから地名で皇后の名前を呼ぶ。それから先はまったくの想像ですが、あの「君が代」の我が君が、隋書の多利思北孤であり上宮法皇という立場に立つとすれば、お母さんは、鬼前出身。そうすると我が君は大分具合が悪い。ピンチが続いている。お母さんが鬼前出身の太后ならば、もし、その有名な御利益のある女神のクケムスヒメガミのところへ延命のお願いに行っても、なんの不思議もない。そこまでは想像の領域だが、非常に話が合う。とにかく鬼前（おにのまえ）というのは、九州の地名である。先ほどの「利（リ）」もそうであるように。とにかく九州に原点を置けば皆すんなりと解釈できる。みんな解けてくる。全部リアルに解釈できる。それを近畿大和に持つてゆけば、何重にも屁理屈を重ねなければならない。聖徳太子が偉いから、中国人に嘘を付いて煙に巻いた。中国人は馬鹿だから、だまされて嘘を歴史書に書いたとか、本当の意味で「お話」になってしまう。

やはり中国の歴史書にあるように、倭国は志賀島の金印いらいの国である。それで七百一年まで続いた。そう考えれば、それなりに理解できる。当たり前のことだが、それを受け入れたら、今までの明治いらいの体制は、がらりと崩れる。そういうこととございます。

六 哭晁卿衡 晁卿衡を哭す

最後に、わたしにとって最近の大きな発見、楽しい発見を報告したい。「晁卿衡を哭す」という題の詩です。晁衡というのは、阿倍仲麻呂の中国名です。卿というのは、お公家さんの尊称です。晁が姓で、衡が名になる。

阿倍仲麻呂は、長安で自ら主人公となって送別の宴を行い、日本に帰ろうとした。ところが船が沈没して死んでしまった。ところが、これは幸いなことに誤報だった。ですが、その誤報が長安に伝えられた。そのときに有名な李白が、阿倍仲麻呂の哀悼の詩をつくっている。

なかなか阿倍仲麻呂という人は中国人にとって外国人でありながら、中国の有名な詩人から非常に信頼され愛されたようです。王維もそうです。いちおう同じ役所で、阿倍仲麻呂は上官で王維は下役にあり、そういう関係があるから王維は当然といえば当然と言えないこともない。けれども李白は官僚になったことはないし、その官僚と無関係な李白が阿倍仲麻呂を哀悼する詩を作ったということとは、阿倍仲麻呂という人はよほど優れた人間的魅力を持っていたのだろう。その詩が残っています。

「精選高等漢文」

李白

哭晁卿衡 晁卿衡を哭す

日本晁卿帝都辞 日本の晁卿帝都を辞し

にほんの ちようけい ていとを じし

征帆一片蓬壺遶

征帆一片、蓬壺を遶る
せいはんいつぺん ほうこを めぐる

明月不帰碧海沈

明月帰らず碧海に沈み
めいげつ かえらず へきかいに しずみ

白雲愁色満蒼梧

白雲愁色、蒼梧に満つ
はくうん しゆうしよく そうごに みつ

短い詩ですね。通念の意味を言いますと、

日本の晁卿・・・日本からやってきた晁衡（阿部仲麻呂）は、彼

は帝都長安を去って行った。小さな帆柱の船に乗って

蓬壺を遶る・・・蓬萊島のまわりを船でめぐって帰っていった。

「蓬壺」というのは、日本のことを言っています。中国

で日本列島にあると言われているのが「蓬萊島・山」。

また「方壺」というものがあつて、その上に島があるよ

うな、そういう表現がある。『山海経』『淮南子』などに

ある、そういう日本にまつわる二つの言葉を合わせまし

て、「蓬壺」という言葉を造って使っている。

ところが、

明月帰らず・・・月というのは、東から出て西に沈んで、また次

の日、東から出る。ですが、このばあい阿部仲麻呂のこ

とを月にたとえている。もう阿部仲麻呂は日本に帰るこ

とはできなかった。

碧海に沈む・・・そして青い海の底に沈んでいった。そして太平

洋の一角と言いましょいか、東シナ海に沈んでしまった。

白雲愁色蒼梧に満つ・・・問題は最後の四番目の句である「蒼梧」

です。白雲愁色はわかりやすい。

問題はこの「蒼梧」の理解です。「蒼梧」については、ほぼ全ての注釈書は、「蒼梧」については、中国の東海岸のなかに二つある。その一つは上海・南京あたりの北にひとつある。もう一方は中国南東方の海岸。この場合は、中国南東方の海岸沿いにある「蒼梧山」を指す。たぶん会稽山あたり近くをいうのでしょうか。その沖合で沈んだ。李白はそのような誤報を得て、この詩を作った。この詩の「蒼梧」は、船の沈んだ「蒼梧山」の近辺。ここで死んでしまったと李白は誤報を得た。そのように解釈する詩なんです。わたしが見たところの範囲では、ほとんどすべての注釈書はそのように書かれてある。

ようするにこの詩は、大した詩とは見なされていない。その証拠に、さきほどの『唐詩選』にも入っていない。李白の詩はこのなかに三十三編入っていますが、この詩は入っていない。また『青木正児全集』にも入っていない。青木正児さんは李白の権威ですが、戦前に東北大学教授をしておられた。この方の李白研究は非常に優秀なもので、この中に李白の詩が百八十二編がおさめられていて、優れた注釈を加えておられる。青木正児さんが、この二百近くの詩を

選んでいても、その中にも入っていない。ここに入れるほどの詩ではない。もちろん日本との関係を述べるときには、時に引用されていますが、それほど大きな評価を受けているわけではない。

しかしわたしが思いますのに、これは生意気ながら、おおきな誤解があるのではないか。

それはわたしもが知っている「蒼梧」は一つだけ。知ってきた「蒼梧」は、洞庭湖の西南方面にある「蒼梧」。中国創立の英雄堯、舜、禹の、二番目の舜が亡くなった「蒼梧」である。かれは都西安をでて南蛮の地へ、おもむこうとした。教化か征服か分かりませんが、揚子江中流の洞庭湖、あそこから、さらに南に行こうとして、広東との間ぐらにある「蒼梧の野」で没した。

諸橋大漢和辞典の「蒼梧」

「二名、九疑。」からはじまる部分

ロ一名、九疑。湖南省寧遠縣の東南。

舜が南巡して蒼梧の野の崩じたのは此處

これは有名な話である。『四書五経』のなかの『尚書』に書かれてある有名な話である。「蒼梧」といえば、わたしはすぐ舜の死んだその場所を思い浮べる。それ以外に、中国の東海岸に「蒼梧」があるということは諸橋大漢和辞典を引けば出てくるが、しかし「蒼梧」を辞書で引いて知るだけであって、ぜんぜんわたしが知らない「蒼梧」です。もう一つ広東の西北に行きますと、「蒼梧県」という県名が地名にある。しかし、そこにあるだけであって、そこで何があつたかという話はない。それに山の中である。

ふたたび諸橋大漢和辞典からの引用

「蒼梧」は県名としては廣西省安平縣の東。

地名として、有名というか安定しているのがここ。香港の西北部になる。他に郡名とかありまして、山名というのがあつて、

イ、江蘇省淮雲縣の東北、一名、雲臺山

とあつて、数行うしろに

〔・・・江南淮安府海州〕鬱州山、州東北十九里、

・・・「俗傳、自蒼梧飛來也」。

(蒼梧山が二カ所ある。)

私は考えますに「蒼梧」は蒼い桐という意味です。蒼い桐の木が生え茂つていれば「蒼梧山」になる。また蒼い桐が多かつたら「蒼梧県」「蒼梧郡」になる。蒼梧という地名は、いくつもあつても不思議な名前じゃない。ですから、わたしは洞庭湖の西側の広東との間ぐらにある「蒼梧」しか知らなかった。

ここから先は、わたしは遠慮なく言わせてもらおうと、長安のインテリも、わたしと同じではないか。彼らは古典を勉強しなければ科挙の試験に通りませんから、舜が「蒼梧の野」に死んだ。そういうことはとうぜん知っている。しかし中国の東海岸に「蒼梧山」が二つある。そういうことを知っているのは、よほど地理に関心のある人は知っているでしょうが、一般の人は知らない。又広東の西側にある蒼梧郡蒼梧県は知っているでしょうが、まさか山の中で阿倍仲麻呂の船が沈んだと思うはずがない。

ですから李白の詩を読んだ場合、長安のインテリが「蒼梧」と言われて、まず思い浮かべるのは「舜の死んだ蒼梧」であるとなつたしは思う。また、そのことを李白は知っていると思う。つまり自分

が「蒼梧」という言葉を使ったら、読者である長安のインテリがこの地域の「蒼梧」を思い浮かべるか、李白は知って作っている。その「蒼梧」は、さきほど言いましたように「舜が死んだ蒼梧」である。

それでなぜ仲麻呂の死に、大陸の真ん中の「蒼梧」が出てくるのか。なぜ李白が持ち出したのか。

李白は、舜と阿部仲麻呂との間に、同じ人間の運命を観た。どんな運命か？。

舜は都を離れて、南蛮へ旅立った。目的は分かりませんが。行きばなつしのはずがない。とうぜん目的を遂げて都へ帰ってくるつもりで出発した。ところが志なかばにして「蒼梧の野」に落ちた。同じく阿部仲麻呂も、日本から長安にやってきて第二の故郷のように過ごした。そして日本へ帰ろうとした。とうぜん、海で死のうとして旅だつたはずはない。中国の文物、進んだ思想、新しい情報を故郷へ、もたらすべく日本へ帰ろうとした。ところが志なかばにして、むなしく海に沈んだ。それに「碧海に沈み」と書いてあるように、沈んだ場所をちゃんと書いてある。この詩には、海の真ん中で沈んだと書いてある。それをもう一回、だれも知らない「蒼梧(山)」の近くで沈んだと言ひ直す必要がどこにある。

それと始めの「蓬壺を遶る」は、明らかに『山海経』『淮南子』などの中国の古典の言葉です。日常の地名用語ではない。それから始まっている。であるならば、あとに出てくる「蒼梧」も、四書五経の『尚書』にでてくる有名な舜の「蒼梧」ですよと言っている。そういう前触れとして「蓬壺」をおいている。実際に沈んだのは「碧海」で、沈んだに決まっている。ですからここは明白に、舜の運命を述べている。

男子ころろぎしを立てて・・・女子でも変わりはありませんが・・・志なかばにして没した人間の無念。しかし志を立てて、不転でおもむく人間が素晴らしい。途中で没したのは残念かもしれないが、人間の名誉ではないか。そういう詩だった。

そうすると、これはすばらしい詩だと思う。

なぜかという、いま人間のと言いましたが。具体的に言えば、あいての舜は天子。聖天子。中国の天子にも、いろいろの人物が居て、ぼんくらの天子もなかには居たと思う。しかし舜は、天子中の天子。実際は分からないが、「堯、舜、禹」の二番目の天子。イメージとしては天子中の天子。もう一方の仲麻呂は臣下。先ほど上級官僚になったと言いましたが、しよせん臣下。しかし李白は、天子と臣下をイコールで結んでいる。

志なかばにして没した人間の無念さにおいて、なんの変るところがあるかと李白は言いたい。

さらにもう一つ。舜は、中国人の中の中国人。しかし実証的には本当の舜はどんな人物か分かりません。調べたら周辺の異蛮からきた人かも知れない。譲つても本当のことは分からない。しかし、たてまえでは中国人の認識では中華の代表。かたや仲麻呂は蛮族の代表というか、東夷のひとり。それを李白は、中華と蛮族をイコールで結んでいる。そんな差異がなんだ。志なかばにして没するくやしきにおいて、なんの変りがあるうか。李白はそう言いたかった。

それだけではなくて、片方は、時間帯がちがう。舜の時代は紀元前三千五百年。これも中華思想に逆撫をするようだが、舜の時代は半年・六カ月が一年と考える二倍年暦の可能性が十分ある。どこまでが二倍年歴か検討する必要がある。それで、とにかく紀元前二千年とする。仲麻呂は八世紀。時代がぜんぜんちがう。その時間的落差三千年。

これも李白らしいですね。三千年の差がなんだ。余りに大風呂敷を広げすぎて、すべて成功しているか調べてみないと分からないが。あまり調子よく書いて弱点になつていくかも知れませんが。とにかくここでは白髪三千丈ならぬ、三千年は一瞬である。そういう立場に立つ。

さらにもうひとつ。片方舜は、大陸の、ど真ん中。中華の洞庭湖で没す。片方仲麻呂は、海のだ真ん中、碧海に没す。大陸と太平洋を舞台に同じ悲劇が繰り返された。これだけ壮大なスケールで人間の死を謳った詩があるでしょうか。

さらに言いまして、人間観は素晴らしいですね。天子と臣下という身分の違い、中国人と東夷の違い。これだけの雄大な時間的、空間的なスケールの差、そういうものを敢然と無視。敢然と無視して、二人は同じ人間であると言っている。そういう同じ人間だと言いつつ人間観は素晴らしい。私は中国のこんな凄い詩を見たことがない。

李白の詩の中のピカイチの詩だと思う。

私は青春時代熱心にゲーテとの詩を熱心に読んだことがあるが、これだけのスケールで人間観を歌った詩は記憶にない。ヨーロッパのゲーテとかの詩にもない。この詩が李白最高の詩なら、これはまさに人類最高の詩ということが言える。

わたしの理解にまちがいがなければ、最高の詩を発見した喜びをお伝えしたい。

この問題では念押しというか、李白の詩で別にもうひとつ、「蒼梧」がでてくる詩がある。「瀛海（えいかい）」という詩である。李白は中国の西の端、蜀の出身の詩人らしいことが知られている。蜀の中や東寄りの山（巫山の高峯）ですが、その山に登ってつくった詩がある。瀛（えい）は大海のことですが、どんな川も最後は大海・

太平洋にそそいでいる。河は海にそそぐに決まっている。・・・その次に「雲を望んで、蒼梧を知り」という一節がある。東のほうに雲ぐらゐは立ちのぼつていますが、李白はその雲を、蒼梧から立ちのぼる、そういう表現。これは明らかに舜の死んだ場所の「蒼梧」。洞庭湖の西南側にある。その「蒼梧」から、雲は立ちのぼる。実証的に調べた訳ではないが、そう見なしている。あきらかに、この詩の注釈でも舜の死んだ場所の「蒼梧」となっている。一方ですべての河は大海に達し、他方で舜の死んだ場所からは雲は立ちのぼっている。そこになにか舜のころざしが白雲の形になつて、わたしに伝わってくるようだ。そのような詩を創っている。

このような例から見ても、李白にとつては「白雲愁色、蒼梧に満つ」の用法は、舜の死んだ場所としての「蒼梧」をおもひ浮かべるという長安のインテリにとつての定番であった。

七 李白の臨路歌

もう一つ見つけたのは、李白の臨終のときに創つたと言われる詩がある。資料に青木正児さんの見事な読みを付けさせて頂いた。

臨路歌

大鵬飛んで八裔えいに振るい、中天に摧くだけて力濟すくはず。餘風は萬世に激し、扶桑に遊んで石袂べいを挂かく。後人之を得て此を伝ふ。仲尼亡びたるかな誰が為なみだに涕いを出さん

大鵬が八方に飛びまわった

・自分は一生、旅をしてまわったことをいうのでしよう。しかももう自分の命は終わりだ・予感したのでしよう。自分の詩は現代の人間ではなく、万世の後の人間の心に届くことを願ってきた：李白らしいですね。私は扶桑・あの阿部仲麻呂のあの扶桑・へ飛んで行こうとした。しかし行けなかった。そして後には、石の夕モトに折れた翼が引つ掛かって残っているだろう。後の人がそれを拾って李白の翼らしいと言うかも知れん。しかし彼らは私の作った詩の真意を全く理解できはしないだろう。

大鵬飛んで八裔えいに振るい、

中天ちんてんに摧くだけて力すく濟すくはず。

大鵬というのは庄子が詠った詩の中の鳳おとり。一堵かきすれば南の端から北の端にいたるといふ、すごい大きな鳥。もちろん空想的な鳥です。李白は若いときから大変好きだったらしい。李白は若い時に、自分を大鵬に例えて、「大鵬の詩」をつくっています。やはり氣宇壮大な詩を作っています。臨終の時でも、自分を大鵬に例えています。「八裔に振るい」自分は八方に飛び回った。・若いときはだいたいぶちこちに行つたらしい。「中天に摧けて力濟はず」しかしもう駄目だ。自分の命は長くない。

餘風は萬世に激し、扶桑に遊んで石袂べいを挂かく。

後人之を得て此を伝ふ。

自分の詩は、現代の人々のためだけに作ったのではない。万世の後世の人間の心にとどくことを願ってきた。・これも李白らしいですね。問題はその次です。「扶桑に遊んで石袂を挂く。」「扶桑」が出てくる。「扶桑」は、古典ではとうぜん日本列島と明記されている。

わたしは大鵬だが、どこへ飛んでいきたいか。扶桑（日本）へ飛んで行きたい。その一角に翼を掛けて、そこで死んで行きたい。後の人が、いろいろ言うだろう。私の詩を読んでいろいろ言うだろう。

仲尼亡びたるかな誰が為なみだに涕いを出いさん

「仲尼亡びたるかな」の仲尼は孔子です。

孔子という人は、いろいろな面がある。道徳家という面もあり、政治思想家という面もあり、中華思想の持ち主という面もある。いろんな孔子像があるんですね。しかしもう一つ、忘れてならないのは詩人としての一面をもっていることです。

有名な話ですが『論語』のなかで、孔子が弟子たちに、「それぞれ、みな自分の思っている志を言つてごらん。どういうことをやりたいか。なにも遠慮はいらないから、みんな言つてごらん。」と言つた。それで各自が、いろいろ言うわけです。なかには勇ましいものもある。先生から教えてもらった政治方針で国家を運営したいとか。それぞれの性格にあうような、それぞれの壮大な夢をそれぞれ語る。それに対してひとり風変わりだったのが、一番年長の弟子である曾そう皙せきが、「私はどうも若い人のように、景氣の良いことはとても言えません。せいぜい自分の家で好きな詩を吟じている。一日を風に吹かれながら詩を吟じながら帰つてゆく。これが一番自分の望みは、それぐらいしかない」とささやかに言つた。

そのあと弟子のひとり、先生はわたしたちばかりに言わせて、先生が言わないのはずるいではないですか。先生も自分の志を言つて下さい。そのように言われて孔子が言つたことは、「自分は、むしろ曾そう皙せきの考えに近い。晴れた日に詩を吟じたり、川べりを詩を吟じて歩くこと。わたしはこれがいちばん幸せだと思ふよ」。肩すか

しというか、わかい弟子たちは、先生がもつとすごいこと、宏遠な思想や論理の話や志を言うだろうと思つてふっかけたりして、問いただし聞き耳を立てていたら、こういう答えだった。この話は有名な話だ。

大自然の中で戯れる詩人の魂を持った孔子、こういう孔子を李白が愛していた。

もう一つ孔子について有名な逸話がある。それは「獲麟^{かくりん}」という逸話で、辞書を引けば分かりますように「筆をおく。執筆をやめる。」という意味で、現在でも使われている逸話です。現代の青年は使わないでしょうが。

孔子のときに、麒麟^{きりん}という動物を捕まえて殺すという事件があった。蛇が神仙的なバケモノとなったものが龍であるように、鹿が年をとつて神秘的な力をもつようになったバケモノになったのが麒麟^{きりん}である。麒麟はキリンビールのキリン。鹿編が付いていますから、鹿の化け物でビールのラベルに描かれているようなイメージを持たれ、そういう形で描かれていた。その麒麟^{きりん}が出てきた。具体的に、とし老いた大きな鹿が出てきた。それを黄河流域のある青年が、その鹿を捕まえて殺してしまった。そういう事件があった。これを聞いて、孔子が非常に落胆した。そのとき『春秋』という歴史書を書いておるときだった。「もうだめだ。そんな麒麟^{きりん}を捕まえるというこんな無茶な事件が起こるようでは、もう歴史書（春秋）を書いておいても、意味はない。書くのはやめよう」と言つて、筆を擱いた。こういう有名な話があります。

わたしのほうからの注釈を入れさせていただきますと、つまらん話なのですが、もと信州でわたしが下宿していた家に、年老いた猫がいた。なかなか賢い猫ですね。障子なども片手で開けますし、女

の子が赤ちゃんでいましたが泣いたら、側に行つてあやします。お母さんなどが見えたらスツと消える。人間の領分を侵さないというか、最小限の役割だけを果たして役割が終えれば、スツと消える。猫だけど、わたしより賢い。わたしは青年として、その賢い猫の生き方に驚嘆していたことがある。

そういう賢い猫ならぬ、なかなか賢い鹿がいたのだろう。そういうとし老いた賢い鹿を神秘化して「麒麟」と呼んでいた。だからそういう年老いた鹿が出てきても、尊重して殺したり食つたりしないという暗黙の社会的ルールがあつたのだろう。ですが当時の青年が出てきて、今風の「迷信だ。ばかばかしい。」と言つて、青年が老いた大きな鹿を殺してしまった。それを観た孔子が、もう駄目だ。こんな世の中に歴史書を書いてもしようがないと、執筆を止めてしまった。

これも理屈を言えば、なにもそんなことは関係ないのじゃないか。青年が年老いた鹿を殺したことと歴史書を書くことは、合理的には無関係じゃないの。そういう世の中だからこそ、むしろ歴史書を書かなければならないと理屈では言えば言える。それはそうなんです、この話の中に、ある孔子の人柄というか、人生の意気込みが表れている。それまでも、ずいぶん世の中の成り行きに落胆していたと思う。その挙げ句のはてに、そのような事件が起こつたの聞いて、はあ！と思つて落胆した孔子の非合理的な、詩人としての孔子のイメージの問題。理屈でいろいろ批判できるけれども、孔子はそういう人柄。これは倫理道德の権化のような孔子とは違う。李白が好きだった孔子はそういう孔子ではないか。そういう孔子なら、李白は自分の気持ちを分かってくれろと考えていた。

もう一つ有名な言葉が重なっている。李白の詩に「仲尼亡びたるかな」。仲尼は孔子のことですが、これも有名な辞です。孔子の弟子に年若い顔回という人がいまして、かれは孔子が最も愛し属目していた人です。ところが顔回が早死してしまた。そのときに、孔子は「天我を亡ぼせり」となげき、わたしの心を伝える人はいないと嘆いた。これも考えてみれば殺生な話で、他の弟子たちはどんな気がしただろう。自分より若い顔回が死んだからといって、「天我を亡ぼせり」はないだろう。俺たちの立つ瀬はないではないかと思つたと思うんです。それはそうなんですが、しかしそう言つて嘆いているなかに孔子の人柄やイメージがある。それをやはり、李白はこの詩で使っている。論語の中の有名な一語です。あの孔子なら私の気持ちを理解してくれるだろう。けれども、あの理解してくれる孔子は、もういない。独断ですけれども、李白の人柄が出ています。しかも大切なことは、この詩のなかにキーワードとして、出てくる名詞が「扶桑」だけ。あの阿部仲麻呂の扶桑が出てくることは、この詩が李白に取つて重要な意味をもつていたことを証明するものだと思う。もうこの時は阿倍仲麻呂は、長安に帰つてきていて、再会していたと思う。難破した船から阿倍仲麻呂は都に帰つていて、日本に帰らず長安で没した。

後一言申しますと、李白は科挙の試験を受けなかった唯一の詩人である。唐代の詩人は、多くが官僚である。そのなかで科挙の試験に落第したのが杜甫である。その中で唯一落第どころか、受けもしなかったのが李白である。・・・これは私の想像ですが、李白が毎年科挙の試験を忘れて受けなかったという事は想像しにくい。やっぱ科挙の試験に通るか通らないかで、高級官僚になれるかどうかが決まってしまう。当時としてすごい身分の差ではないか。ですから、受けなかったこと自身が人生観の表現である。

そういう李白だからこそ、舜と阿倍仲麻呂をイコールで結んだすばらしい詩を作れたのではないかとわたしは思います。

終わりに

最後に一言だけ付け加えたい。

実は私はある人の薦めで戦争問題に取り組み、その関係でだいぶ前の本ですが、朝日新聞社の『戦争』という厚い本を読む機会がありました。短いたくさんの文章を集めてある。ある人の文章にぶつかつて胸を突かれた。書いておられるときに九十歳ぐらいの方で、今生きていられたら百歳を越えておられると思ひますが。

「明治憲法の問題、それを背景にした明治以後の歴史認識の問題、これが誤つていた。誤つたままで、それを正すことが出来なかつた国民が、今回のような敗戦という目にあつた。そういう目にあい、そして戦場でたくさんの兵士を失い、あの空襲で妻も子を死なすという目にあつた。それは結局誤つた歴史を、そのままにしてきた国民の性である。これはやはり今後われわれは誤つた歴史感を正さなければならぬ。」

そういう短いけれども、心にしみてくる文章がありました。もちろん直接は戦争中の皇国史観のことを言つておられると思いますが、わたしの目からはそれだけではないと思う。戦後の歴史も、今日申しましたように、わたしの目からずいぶん嘘がある。ずいぶん間違つたままになっている。わたしがいくら言つても知らん顔をしている。歴史学者から、文部大臣から、教科書検定官から、みんな知らん顔を続けている。

誤った歴史をそのままにしておくことは、その国民にやがて大きな災禍をもたらすであろう。これが本当ではないかと思つた。

皆さんは、戦争中は（軍部が）ああ言つたから戦争に入つたので、戦後は違ふだろうと思われるかも知れませんが。わたしが言うまでもないと思うがどうでしょう。国がぼんやり、ぼやけてきた。国のために死のう。一生涯を自分の仕事をやりつくし国のためにつくそうという人はいませんわね。国が、本当にぼやけてきた。ぼやけたときは国がいつまで続くか。外国の軍隊に守られ、それがどのような悲劇に、いつの日ふたたび。ふたたび嘘の歴史を覚えて、うそでも試験に通ればそれで良いのじゃないと、子供も母親も父親も言つてきたその責任が、この災禍をもたらした。第二の敗戦が、明治が、大きな悲劇が、こなければ幸いです。

わたしはもちろんそうあつてはならないので、わたしは間違つた歴史を間違つたと言う。わたしが間違つたなら言つてもらえば喜んで、わたしの考えが間違つたと訂正させて頂きます。

どうもありがとうございます。

質問1

九十八年六月二十八日の先生の講演会「DIS COVER(June, 1998)」という雑誌の中に書かれてある Japanese Root について紹介されていた。この論文の最後に、気になることが書かれていた。

Japanese Root そのものについて、日本人自体が知ることを欲しないと書かれてあつた。疑問に思つたので、説明をお願い致します。

(回答)

このことを御承知でない方がおられるので、その説明から入りたい。

これは縄文人が南米にいたという報告をアメリカ側から書かれたひとりであるエバンズ夫人という方から、五月にわたしのところに送られてきた手紙の中に「Japanese roots」という論文が資料として入つていた。もちろん英語です。DIS COVER(June, 1998)というアメリカの雑誌で、日本で言えば中央公論とニュートンと科学朝日を一緒にしたような雑誌に書かれている。これに JARED DIAMOND という豪勢な名前の人が、「Japanese roots 日本人の起源」という8枚ばかりのかなり長い論文を書いておられる。それを六月二十八日に紹介した。

その論文の結論は「現代日本人はコリアンである。日本人は朝鮮人である。」という、すごい結論である。

紀元前(B.C)四百年ごろの段階で、朝鮮人が日本列島に襲来して、それまでの縄文人を征服した。その結果が現代日本人である。結論から言いますと、そういう結論なのです。

おもしろかつたのは論文を観たとき、英語を読むより最初目に入つた写真である。同じページにアイヌ人の髭もじやらの写真と関東の古墳時代の武人の人物埴輪があつた。初めはこの人は何を言いたいのか、ひじょうにとまどつた。しかし読んでみると明瞭に論旨は分かつた。縄文人はアイヌで代表される人々であると彼は考えた。人種的にも髭もじやらの顔をしています。それに対して、弥生人である関東の武人埴輪で示される顔はたいへん違つている。これが朝鮮人の顔であると彼は考えた。確かに人相は違つている。これが朝鮮半島から渡つてきて征服した後の姿である。だから現在日本人は、朝鮮人が祖先である。そういう論旨である。われわれ日本人からみ

ると、びつくりする内容です。しかしアメリカ人の論文は、たいへん論旨が明確でひじょうに分かり易い。これが日本人とぜんぜん違うところですよ。日本人の学者の論文は読んで分からない。なぜそうなるのが、わたしは読んでいても分からない。しかしアメリカ人の論文は理由と結論がハッキリ書いてある。こうであるから、こうである。こうでないから、こうでない。ぜひ反論を英語で書いて、今年中にエバンズさんに送りたい。英語で書くこと自体は大変だが、論旨ははっきり書いて書きやすい。論旨を検討して根拠をあげて反論すればよい。

それで JARED DIAMOND さんの認識に欠けていることがある。それは中国の『山海経』という書物の記録である。周の戦国時代に書かれた記録です。孔子より遅くて孟子と同時代です。日本では縄文時代晚期に当たる。そこに蓋国という平壤（ピョンヤン）近辺らしい国の話を書いてある。「蓋国は鉅燕の南、倭の北に在り、倭は燕に属す。」（山海経、海内北経）このように書かれてある。今の北京あたりが巨燕です。

そうするとこの倭は、どうも海の向こうではない。現在の朝鮮半島の南半部・韓国部分のところを、倭と呼んでいる。倭に住んでいるのはもちろん倭人である。そうすると海の向こうに住んでいるのは、志賀島の金印がしめしますように倭である。これを、ぜんぜん別の倭と考えるのは無理がある。別の倭と処理をする学者もいますが、わたしは無理だと思う。海一つ隔てたところが両方倭で、ぜんぜん別人種の倭人だと考えるのは、机の上では言えるけれども実際問題としてあり得ることではない。つまり玄界灘の両岸に倭人が住んでいる。海洋民族であるギリシヤ人だつて、多島海であるギリシヤとトルコ側の両方に住んでいる。あれと同じだとおもう。だから、ここに朝鮮半島の南半部に倭人がいたというテーマが出てくる。

このことは『三国史記』『三国遺事』に書かれていることと矛盾しない。それは百濟建国の問題である。高句麗の建国の英雄、中国式には朱蒙という人がいた。その高句麗の初代王の第二夫人が第一夫人にいじめられて、長男・次男を連れて集安を亡命というか脱出した。そして京城（ソウル）付近、扶余へ来た。兄が海岸を、弟が内陸を治めた。兄が失敗し弟が統一して「十濟」を作った。「十姓済民」、十の姓を持つ民を救ったから「百濟」と名乗った。幸いなことに年代が書いてあつて紀元前一世紀前半。紀元前一世紀前半の年号が書いてあつて、そのときに第二夫人が来た。

その紀元前一世紀は、当てはめると弥生時代中期。そうすると無人地帯に來たはずがない。人間がいた証拠に、縄文土器がたくさん出ている。人間がいなくて土器が出るはずがない。日本と同じような縄文土器を作っていた先住民がいた。

（事実韓国の光州の博物館には、日本の縄文土器とそっくりの土器が展示してある。韓国の学芸員に確認したが、九州の甞（とどろき）曾畑土器であるとはつきり答えた。この土器がどっちからどっちに行つたかは別にして、韓国光州と九州熊本付近に同じ土器が存在することは疑いがない。）

そこへ騎馬民族が来て征服した。征服だけど救つてやつたと、美しく表現している。侵略・征服したことを「国譲り」と美しく言っているのと同じことです。このことの意味することは、征服者はとうぜん高句麗語を使つていた。第二夫人も、子供も、部下も。ところが征服された方は、何語を使つていたか。高句麗語を使つていたはずがない。当然『山海経』から見ると、倭語を使つていた。征服者は高句麗語、被征服者は倭語を使つていた。そういう世界が成立した。だから百濟語の中には、基本的に倭語が含まれている。

ということとは韓国・朝鮮語の中に倭語が含まれている。

その一番の証拠が百済(くだら)という言葉自身にある。これは倭語である。果物の「くだ」。「くだらん」はその否定語。「くだ」は良い意味で「豊かな」という意味です。羅(ら)は村・空(そら)の「ら」で、日本語にたいへん多い接尾語です。「くだら」は実り多き豊かな土地という意味です。

ところが韓国・朝鮮人に百済(くだら)と言っても通用しません。韓国・朝鮮読みをして、そこを百濟(ベクチュウ)と呼ぶ。絶対百濟(くだら)とは言わない。その百濟(ベクチュウ)は、征服を美化した政治用語である。これに対して日本語の「くだら」のほうは単なる自然地名。しかし考えてみたら、政治地名を付けるまで、その土地を呼ぶ名がなかったということは考えられない。権力者が政治地名をつけるのは勝手である。しかしその後あの名は使いたくない。自然地名を作つて呼びましょう。そんなことは言うはずがない。

しかし、もともと百濟(くだら)だったが、いま支配されていて南朝鮮・韓国にいる以上は高句麗語を使わなければならない。百濟(ベクチュウ)と呼ばなければならぬ。しかし支配されていない日本列島にいる倭人は、昔ながらの百濟(くだら)と南朝鮮西部分を言っている。そう考えると非常に分かりやすい。ほかに多くの例がある。

金達寿さんはそれを理解できなかった。共通する単語があれば、朝鮮語だとしている。つまり朝鮮人が日本に来たと考えられて、朝鮮人が帰化人になった証拠であると主張しておられる。奈良県の「奈良」も、「ウリナラ(我が祖国)」の「ナラ」で朝鮮語である。そう主張されている。

しかし考えてみたら、日本語の「なら」は「ならず」という動詞がある。均(な)したところが、「なら」です。日本には字地名に「なら」がいつばいある。日本は山だらけだから、均(な)さなければ住めない。「日

本平(にほんだいら)」と名詞など一群のセットである。韓国語には対になる動詞がない。やはり名詞・動詞がセットになっているほうが元で、名詞だけのほうが伝播したと考えるのが筋だと思う。

第一「ウリナラ(我が祖国)」という言葉がもし高句麗語だったなら、一番目に集安(現在の満州)を指さなければならぬ。あるいはもつと前の中央アジアから騎馬民族が来たなら、中央アジアを指さなければならぬ。もし集安あるいは中央アジアを「ウリナラ」と呼んでいるなら、騎馬民族語・高句麗語だと考えても良い。しかし知識はあまりないが集安あるいは中央アジアを「ウリナラ」と呼んでいる例を、私は今のところ知らない。「ウリナラ」は現在の朝鮮・韓国を指しているように思える。

「ウリナラ」の「ウリ(我が)」は、わたしは絶対高句麗語であると思つている。「ウリ(我が)」という第一人称を、被征服者の単語で表現するという、気の抜けた支配者を見たことはない。ぜつたい征服者は、第一人称を征服したほうの自分の言葉で呼ばせる。「ナラ」は現地の人と言っている言葉である。「ウリナラ」という言葉自身が、征服者と被征服者の関係をしめす証拠である。

だから「Japanese roots 日本人の起源」に戻ると、紀元前四百年ごろの段階で、「朝鮮人が日本列島に襲来して、それまでの縄文人を征服した。」と JARED DIAMOND さんは言っている。『山海経』を読んでいない。しかし朝鮮から来たからといって朝鮮人だとは限らない。同様にアイヌ人が日本に住んでいれば、アイヌ人が日本人になる。しかしアイヌ人も日本に住んで居たからといって今の日本人とは限らない。逆にアイヌ人が昔日本に住んでいても今の日本人と違うのだと言う認識が DIAMOND さんにはある。それと同じように朝鮮に住んでいても朝鮮人とは限らない。倭人が朝鮮南半部に住んでいたという問題を考えなければならない。

質問2

「則天武后が、日本国（近畿天皇家）という名を承認した」と先生は言われたが、承認したという事は、その前に日本という名前を使っていた人がいたから承認したと理解して良いのか、それともう一つ、それ以降日本という名前を、時の権力者が使ったのかどうか。確認したい。

（回答）

最初の点、「日本国」が公式の称号になったのは七〇一年以後である。七〇一年以後から使った名前であることは中国側の歴史書が示すところである。それ以前はどうだったかというのは、わたしにとつては非常にありがたい質問です。

ここで王維の詩を見て下さい。阿倍仲麻呂と別れる詩です。その表題、極玄集では「送晁監歸日本」とあり、「日本」と書いてある。「日本に帰る」と書いてある。「日本国」ではない。これが後世の本、たとえば『唐詩選』や『須溪先生校本・唐王右丞集』という改訂した本は「日本国」となっている。私は、これをはじめ見たとき、気が付いたけれどもあまり大したこととは思わなかった。「日本」と書いてあつても「日本国」のことだと考えていた。しかし良く考えてみると、どうも簡単ではないという問題にぶち当たってきた。

「日本国」が正しい。つまり後になつて正確に「日本国」と直しただけだと考えた場合、なぜ王維が日本国の「国」を付けなかったかという問題を考えなければならぬ。忘れたのか。うっかりミスで日本国の「国」を付けなかったのかとなる。この場合、王維がうっかりミスで「国」を付け忘れたという考えは採りにくい。一番古い版本である極玄集に「国」がないのだから、そういう考えは採りにくい。

ここにとんでもない問題がある。

ごぞんじ博多湾福岡市板付遺跡（博多空港近く）、ここに最古の縄文水田があることはご存じだとおもいます。その板付の字地名が「日本（ヒノモト）」^{あぞ}。又もうひとつ「日本（ヒノモト）」がありまして、吉武高木遺跡のある室見川の下流にある。中間に樋井（ひい）川をはさんで両岸にも「日本（ヒノモト）」がある。

（調査は『明治前期全国小字調査書（内務省地理局編纂基本行書、ユマニ書房刊）』で、行いました。第二次世界大戦の空襲で、ほとんど消失、北部九州と青森が残る。残っていたから出来たのである。）

「樋井（ひい）」、これにも昔から関心を持っていて、漢字はこういう漢字であるが、海洋民の井戸を意味する「日井」ではないかと、ばくぜんと考えていた。太陽の井戸です。海洋民にとつては、入り込んだ適当な入江は大事です。縄文や弥生に、船を係留するのに都合がよい適当な深さをもつた入江・湾が必要である。けれども、それだけではダメで水がなければならぬ。井戸が重要である。倭（い）もほんらい倭（ゐ）である。井戸も倭も同じワ行のゐであるので、井（ゐ）とかかわりがあるのではないかと、考えている。

話をもとにもどして、つまり博多湾岸は日本（ヒノモト）の地である。そうなると阿倍仲麻呂は、日本（にほん）に帰ると言わずに、日本（ヒノモト）へ帰ると言ったのでないか。王維と阿倍仲麻呂は関係が深いので、あえて日本国と言わずに日本（ひのもと）へ帰ると言ったのではないか。これは断言は出来ないが、そう考えることが出来るという面白い問題がある。

そのように理解すると、今まで解けなかった問題が、解けてくるというおもしろい発見がある。

『失われた九州王朝』で取り上げてあるが、『三国遺事』の六世紀の新羅の記事の中に、星が不思議な輝きを見せた。今までにない、きらきら輝いているのを見た。いつたい何だと、新羅の国王がおいでいる朴者（古い官僚）に占わせた。すると「日本の兵、故郷に帰る。」という良い知らせ・前兆だと言った。それで喜んでいたら、はたして日本兵は引き揚げていった。これは六世紀に、詩の形で出てくる。その六世紀という倭のまつただ中、倭国が当たり前のきなかに、詩の形で「日本兵故郷に還る」と書いてある。国号として日本国になったのは七百一年であるが、倭国段階で「日本（兵）」を使っている証拠としてあげた。しかしそれは、その詩を理解する上で、そう理解しなければならぬというだけであって、なぜ六世紀に「日本（兵）」が出てくるのかは分からない。

ところが今王維の詩を「日本（ヒノモト）へ帰る 博多へ帰る」という意味で、八世紀段階で使っていると考えれば、六世紀段階でも「日本（ヒノモト）の兵故郷に還る」を「博多湾岸に帰る。」と考えれば、意味がつながってくる。

それからあとのほうは、日本という言葉は後の段階でも、たとえば豊臣秀吉の段階でも思い出したように使われる。それと「日の丸」も、けっこう古いみたいですね。福岡県朝倉の方でも筑紫舞というおもしろい舞がありまして、神社の奉獻額の絵馬の中に、それを舞っている人の扇に「日の丸」がある。その額は最近のものではない。ですからわたしの想像ですが「日本（ヒノモト）」という言い方と「日の丸」は、何らかの関わりがあるのではないか。いまのところ、そう思っています。これもいまは単なる作業仮説であって、途中をつなぐつなぎ目がないので今後の課題にしたい。

質問3

歴史の話は高校卒業以来遠のいていましたが、最近また読み始めました。学校時代から不思議だったのは、先ほどの金印。高校時代聞いた話では、金印がたんぼや畑から出てきたと聞いた。なぜ大事な金印が、そこから出てきたのか。「金印は捨てられたのか、埋められたのか。」というあたりが、たいへん疑問でしたので、その問題を聞きたい。そんな大事なのなら、（古墳などから）出てきたものなら分かるのですが。まただれかが護っていたというなら分かるのですが。なぜそのようなところから出てきたのか、たいへん疑問です。

（回答）

やはり一番歴史をやったことのない人が一番鋭い質問を出す。ふつう言われているところは、甚兵衛さんというお百姓さんが、畑を耕すというか掘っていて何かに当たった。掘ってみたら大きな石が三つ立っていて、（ドルメンのような）蓋のような形になっていて、開けて観たら金印が出てきた。そういう形で甚兵衛さんが黒田藩に報告した報告書には書かれてある。そのほかに、いや本当はそうではない。そのほかに甚兵衛さんは土地持ち・百姓さんとしてはお金持ちであって、実際に掘ったのは作男二人、その方々が掘っていて何かに当たったという資料や、大きな石が立ってあったのは四本だったという別の資料も残っている。実物の金印は黒田藩に献上して、現在黒田家から福岡県に寄贈されて博物館にある。

さて、このあたりの回答では納得されないとおもう。そこで実は四・五年前から、この問題を熱心に追求された方がいる。福岡市教育委員会の学芸員のトップだった塩谷勝利氏という方です。九州大学の考古学を出られて永年発掘に取り組んでこられた。その塩谷

さんが最後の仕事として、少しまえ金印の遺構探しにあたられた。つまり金印は出てきてありますが、その石組みを探した。たいへんな苦勞をされて可能性のあるところを掘って掘って掘りまくった。塩谷さんは、すごい人です。一緒に行くところを掘って掘りまくった。百姓さんが土器のかけらをもって現れる。そして、その土器を判別される。庶民の協力体制ができて驚きました。官僚が畑から出てきた土器を持ってこいと言っても聞く人はいないが、壹岐出身のお酒好きで豪快な塩谷さんが頼んでこそのことである。とにかくその塩谷さんが金印公園とその周り、それだけでなく、学者がいろいろな説を唱える候補地を、全て掘りまくった。最後は海の底まで、アクアラングで潜って探した。しかし残念ながら。石組みがないだけでなく、弥生の「け」もない。つまり土器のかけらなどが全く出ない。塩谷さんは本当につくりした。そこだけではなくて、上の稜線の畑のほうも掘ってみられたらどうですか、と言ってみたりした。そこからは弥生の土器も出ているが。しかしそれは甚兵衛さんの言っている場所とはぜんぜん違う。

それで考えてみてもよい面白い問題がある。ある人から示唆を受けました。印鑰神社いんやくという神社があります。この字は一番簡単な字で、本当はもつと難しい字です。あまりお聞きになったことはないでしょうが、九州福岡近辺には、やたらにある。普通の理解では律令制の元での、その印をおさめて御神体にしてあると観光案内でも、そのような解説になっている。しかしこれは少しおかしいと考えている。律令制の元でこの神社があるなら、関東にもなければならぬ。しかし一つもない。近畿は九州博多湾岸の何倍も、なければならぬ。ゼロではない。わずかにはあるが、ほとんどない。律令制が全国に施行されたなかで、なぜか北部九州だけ神社を作っ

て印を納めた。わたしの机の上の判断では、そういうことは考えにくい。これは一体なんだろうか。もしかしたら倭国の印を納めた神社かも知れない。もちろん律令時代の神社であってもよいが、元は倭国の弥生よかのほに遡る習わしかもしれない。

そうすると『魏志倭人伝』に関して、おかしいことがある。卑弥呼の金印が出てこないのは、問題ですが、それと以上におかしいのは銀印や銅印が出てきていない。倭人伝では、「印綬を賜う」と書いている。金印は一つだけだから出る確率は少ない。だから金印は別にしても、銀印・銅印が出る確率は高いが、どこからも出ていない。弥生時代のお墓や古墳時代の古墳からも、これだけ発掘されていても銀印や銅印がいつさい出てこない。

それで黒塚古墳を発掘しているときに面白い話がある。一人の学者が「きつとここからは銀印が出る。よりにいねいに掘ってくれ。」と現場のかたに言った。この方は三角縁神獸鏡を魏の天子からもらった鏡と考えていて、強烈に主張されている人である。もちろん邪馬台国近畿説です。理由を聞いてみると、なるほどと思った。もし三角縁神獸鏡が魏の天子からもらった鏡なら、三十数面黒塚古墳から出ている。百面の中の三十数面である。とうぜん葬られたご本人は金印は無理にしても銀印ぐらいは、もっているはずだ。それで三角縁神獸鏡が魏の鏡であるなら、銀印が出るからいいねいに掘ってくれという話自体は筋が通っている。しかし結局、銀印は出てこなかった。黒塚古墳では、盗掘されていないのが一つの値打ちである。盗掘されていないと、現場の作業員のかたがていねいに発掘された。これが黒塚古墳の値打ちです。盗掘されていたら、なんとも言えない。しかし銀印は出なかった。この話一つをとってみても、三角縁神獸鏡は魏の鏡ではない。三角縁神獸鏡が魏の鏡なら銀印が出なければならぬ。

わたしは黒塚古墳から出ないのは当然だと思っているが、どここの古墳からも出ないのはおかしいと思う。だから目見当の一つの可能性として印鑰神社にあるのではないかと推察している。

もう一つ、印綬は墓の中にばかり有ると思っていた。魏志の中にこういう話がある。魏の天子の宰相がいた。権勢を振るって、魏の天子から金印ではないだろうが立派な印綬をもらった。ところがなくなつた後で、汚職というか、背信行為をしていたことが分かった。天子が烈火のごとく怒って、印綬を取り返せと言った。それで使いを派遣して、墓を暴いて印綬を取り返したという記事がある。

あつ、そうか。印綬は墓の中に埋めるのか。それで墓の中にあつて当然と考えていた。考えてみれば、印綬は功績を挙げた本人一人に与えるのであつて、その子孫の代々の者に与えるのではない。本人の墓の中に埋めるのが一番筋である。わたしは長い間そう思ってきた。しかし中国ではそうである。しかし倭国は同じだったか分からない。墓の中ではなく、印綬は墓の中ではもつたない、と思つて御神体にして神社に祭つた可能性がありはしないか。これもまつたく机の上の想像です。

だから印鑰神社のご神体の可能性がなくはない。何回も足を運べばよい。博多湾岸の印鑰神社を一軒づつ訪ねてお願いすればよい。すぐには無理でしょうが。ふううご神体は、崇りがあるとかで、見たらいけないと伝わっているのが普通です。しかしご神体を覗きたくなるのが人情である。お世話をしている人には知っている人がいると思う。真面目に先祖の教えを堅く守っている人もいると思うが、何かのきつかけ、たとえば移転などで見たことがあるかもしれない。石のかけらや、銅の鏡などが祭つてあつてガツカリすることもあるかも知れないが。しかし私などから言えば、御神体は石のかけらの

方がすごい。銅の鏡なら弥生以後に決まっている。しかし石のかけらなら、これは縄文・旧石器にさかのぼる神様です。石のかけらのほうが古い。まあしかし普通は、石のかけらを観てがっかりしたりしています。ですから関心をもたれたら、調べる値打ちのあるテーマであると考えています。この辺で勘弁していただきたい。

質問4

邪馬一国の領域と、卑弥呼の墓はどこにあると考えられているのでしょうか。

(回答)

倭人伝では御承知のように邪馬一国の領域は、北と西は書いてある。東と南は分からないというのが正確です。邪馬一国自身は七万戸とあるのだから、博多湾岸とその周辺を含むさうとう広い領域です。その中心領域は博多湾岸です。もちろん糸島も含んでいます。糸島・博多湾岸は三種の神器の分布する場所ですから。その一角にあるだろうと考えています。(それに奴国は書いて有るが、王が存在しません。)

もし詰めると言われれば、今お話に出ました春日市のなかの須玖岡本遺跡が問題となる。これは明治の時期に農家の庭先からみつかったものです。甕棺(ミカカン)のなかに入っていて、鏡が三十面とよばれるものが多くて、なかに夔鳳鏡(キボウキョウ)という魏の鏡が出てきた。夔鳳鏡については考古学者が困って、別のところから紛れ込んだのだらう。そういう話にしている。しかし、ここを発掘された京大の梅原末治さんは、間違いなく、この夔鳳鏡はここから出たものだ。そして梅原さんは夔鳳鏡そのものの年代を調べる為に、ヨーロッパ・ベトナムまで行かれ調査されて改めてこの夔鳳鏡は魏の鏡と認定さ

れ、この遺跡は二世紀後半から三世紀前半であるというご自分の説を訂正された経過がある。この面でも、前漢式鏡・後漢式鏡とはちがう様式の夔鳳鏡きぼうという魏の鏡が出てきています。

もう一つ重要なことは、その鏡の紐ひものところから、絹が出てきた。絹そのものは今はめずらしくはないが、ここは中国の絹である。つまり中国の絹と倭国の絹とは今ハッキリと区別がついている。顕微鏡で布目順郎さんが研究されたのですが、絹の目の粗さや蚕の種類から見て倭国の蚕と中国の蚕とは種類と飼いがちがついている。洛陽（中国）・平壤（北朝鮮）あたりとは蚕の質が違っているし、また織りかたの技術が違う。

弥生時代は前期から中期・後期まで、糸島・博多湾岸は絹だらけですが、その中で中国の絹は須玖岡本遺跡から出土した絹、一つだけである。

さきほどの黒塚遺跡から絹が出てきましたが、もちろん倭国の絹で、木棺は桑の木で作られていたので、近畿に絹・蚕を糸島・博多湾岸からもたらした人物であろう。その絹は倭国の絹ですから中国からもたらした絹ではなくて、博多湾岸からもたらした。もちろん近畿からは、中国の絹は出てきていない。

そういう面で、卑弥呼の時代に最も接近しているのが、この須玖岡本遺跡である。その遺跡の丘の中腹に熊野神社がありまして、先ほどの岡本遺跡から出てきた甕棺ミカカンをふくんだ巨大な石支墓が熊野神社のところに置いてある。この熊野神社の下あたりに墓があれば、時代的に卑弥呼の墓にいちばん近い。このように見えています。だがしかし須玖岡本遺跡が卑弥呼の墓かと言いますと

時代的には同時代であるが、この須玖岡本遺跡が卑弥呼の墓とは考えない。なぜならこの墓の人物より卑弥呼のほうが位が高い。第一金印が出ない。それにもつと中国の絹がたくさん出てきて欲しい。倭人伝ぜんたいの内容からみると、いろいろなものが足りない。満足できない。須玖岡本遺跡自身が卑弥呼ひみかの墓であるとは考えられない。ただ出てきたところは農家であるので、いまは新興住宅になつていて発掘できないのが残念です。また一つの可能性として平地にある須玖岡本遺跡より熊野神社の位置が高い。その地名は戸籍では、字地名では「山（ヤマ）」と呼んでいる。邪馬一国の「ヤマ」である。

ですから、論理的に、目見当で、強いて言うならば、卑弥呼の墓が熊野神社の下になる。別にここに限定する必要がないが、やはり糸島・博多湾岸のどこかである可能性が大変高い。

もう一つの焦点は、卑弥呼の墓に限定する必要はないが、糸島の三雲遺跡から井原いわた、平原ひらばらに広がる場所である。三雲・井原は江戸時代の偶然の発掘、平原はミカンの木を植え替える時に偶然見つけた。本当に王家の谷というべきところである。まだまだこの辺りから何かが出てくると思う。

糸島・博多湾岸の発掘は全部偶然発掘である。見込み発掘はない。見込み発掘もやって欲しい。それと発掘をやって欲しいのは吉武高木ですよ。なんと農水路での改造工事の発掘ですよ。わずか幅三メートル、長さは百メートルぐらいの農水路を作るとき出てきた。それで東側のところから二重の宮殿跡が出てきた。その北側は水田、ぜんぜん手がつけれられていない。間違いなくいろいろなものが出てきますよ。

そのようなところを計画発掘してほしい。

質問5

ご質問したのは五世紀の段階の『後漢書』にありました「大倭王は邪馬臺に居す」という問題です。その場合「邪馬臺」の「臺(台)」を、「ダイ」と理解されているのか、あるいは「タイ」と理解されているか。

どうしてこのような質問をするかと言いますと、先生の『失われた九州王朝』では、三世紀『三国志』の段階では「邪馬壹国」、それが五世紀の段階では『後漢書』では「邪馬臺国」でもおかしくない。それは五世紀の段階ではいわゆる東アジアの中で、あるゆるところ「臺(ダイ)」が使われた。「臺(ダイ)」の氾濫の中の「邪馬臺国」が使われても決しておかしくはないと言われていた。私のこれまでの理解では、「邪馬壹国」の「壹(イチ)」は「倭(キ)」と関連がある」と理解し、「邪馬臺国」のは「大倭」と関連があると理解していた。ところが最近の見解では、「邪馬壹国」の「壹(イチ)」と「邪馬臺」の「臺(台)」は範囲が違う。邪馬一は大きな領域、邪馬台はもつと小さい狭い領域だとなってきた。そうする今までの私の理解では、「壹(イチ)」であれ、「臺(ダイ)」であれ、中心地名は邪馬(ヤマ)であるという認識でした。それで「ヤマ」の地を探せと考えてきた。ところが臺(ダイ)を低湿地を意味すると言われ、あるいは日本語としての具体的な地名であると解釈された。そうするとこれ以後、邪馬臺の「臺(ダイ)」が低湿地であるならば、この日本の中で九州では具体的な「ヤマダイ」の地を探せば良いとお考えでしょうか。もう一つ隋書「イ妥(タイ)国伝」の「タイ」と「邪馬臺」の「ダイ」あるいは「タイ」と何か関係があるのででしょうか。その当たりのところをお伺いしたい。

(回答)

ひじょうに、わたしの本を良くお読みになって、非常に詰められたご質問をいただいた。わたし自身が苦しんで対面して一歩一歩前進していった問題について、ご質問をいただき感謝しております。

今ご質問の件はどういうご質問かと言いますと、私の二番目の本『失われた九州王朝』を読まれた方はご存知ですが、『三国志』をとる限りは全部「邪馬壹国」と書いてある。『三国志』を考えるばあいは邪馬台国ではなくて邪馬一国である。そういうことを主張したわけです。これにたいして邪馬台国というのは、江戸時代の初めに松下見林が『異称日本伝』の中で、「壹(イチ)」を「臺(ダイ)」に直して、邪馬臺(ヤマト)と読んだ。それは全く駄目である。

これに対して「邪馬台国」というのは、『後漢書』そのものは五世紀に作られたものであり、五世紀段階の話をする場合は、「邪馬臺国、邪馬台国」で良いが、それは三世紀の『三国志』の段階とは違うのだと言う論理を主張しまして、三世紀『倭人伝』に関する限りは邪馬一国でなければならぬ。そのところは全く変わってはいません。

邪馬一国の意味は、前に書きましたが、邪馬倭(ヤマキ)国と言うべきところを、倭(キ)を音が似ていて西晋朝に二心なく忠誠をつくすという意味で、「壹(イチ)」にしたと考えています。中国の古い用法で韓国の中に孤耶という土地があるから孤耶韓国。越の国の中の閔(びん)という土地があるから閔越(びんえつ)である。それと同じように倭(キ)の中に邪馬(ヤマ)という土地があるから、邪馬倭(ヤマキ)国。それを「倭(キ)」を「壹(イチ)」に変えたのは、おそらく壹与(いちよ)だと思う。「壹」を使ったのは音が似ていて「中国の天子に二心なく忠誠をつくす。」という中国に対するオベンチャラ用語だとわたしは観ている。それは『三国志』では「一」

という言葉は盛んにでてくる。一番尊重される徳目は、「一 壹いち」である。臣下として一番大事にされている。一番嫌がられている徳目は「二 貳に」である。憎むべき背徳の行為とされている。二心、一方では魏に忠誠を誓い、一方では呉に忠節を誓う。両天秤を掛けていたものがたくさんいたと思う。どちらが勝つか分からないから。権力者から観たらたまらない。こっちに服属を誓って贈り物を贈ってきたから喜んでいたら、向こうにもちゃんと送っていた。そういう時代ですから「邪馬一國」はまさに「中国の魏の天子に二心なく忠誠をつくす。」という意味を持つ。これも変わってはいません。倭の五王と同じように一字の名前で「倭与」を「壹与」と変えたのだと思う。

中国流にはダイというのは、元は高台、『三国志』では天子の宮殿ないし天子を指すということに使ってはならない言葉であった。しかし「臺」という言葉は『後漢書』では天子に関係なく使われている。だから『後漢書』の場合はそれは現れうる、という形で述べた。しかし、わたしの中に「邪馬臺(ヤマダイ)」の問題をもう一步掘り下げて取り組んでみたいという気持ちを持っていた。それで定年退職になってから、真っ先に取り組んだのが「邪馬臺」の「臺(ダイ、タイ)」の問題である。

それで『明治前期全国小字調査書』を見ると、九州福岡県から大分県の字地名に、村毎と言っていいほど、「ダイ、タイ」がある。「臺」・「臺の内」・「臺の前」・「臺の北」など軒並みある。これを中国流の「ダイ」、高台を指すと言葉としては理解しにくい。普通字地名は八割ぐらいは日本語で、後の二割は「釈迦」とか「天神」とか、漢語である。これだけ中国語が分布しているとは考えにくい。もしかしたら「平らな」・「日本平」などの日本語(倭語)かも知れ

ない。それで現地を調べに行った。簡単に分かった。全て低湿地であった。『明治前期全国小字調査書』でも「臺(ダイ)」という字を使っているんですが、「ダイ」と濁って発音するとは限らない。この字を「臺の内(たいのうち)」など「タイ」と発音して使っています。私は以前は中国風の高台としての「臺 台(ダイ)」と思っていたのですが、そうではなくて、「臺(タイ)」というのは「平らな」を意味する低湿地の日本語と考えるに至った。

それでは『後漢書』では「其大倭王居邪馬臺國」と書いてありますが、それでは後漢書の大倭王が、居たところはどこか。それはハッキリしている。

なぜかというの後漢書は邪馬台國のありかは書いていない。ありかが書いていないと言うことは分からないから書いていないわけではない。『後漢書』というのは、当然百五十年前の『三国志』が出ていることを著者范曄はんぼくも知っているし、読者も百も承知している。前に書かれた『三国志』を脇に置いて、新しい『後漢書』を読むというスタイルに当然なる。『三国志』にはとうぜん「邪馬壹國」のありかが方角と里程付きで書いてある。『後漢書』は書いていない。その点について『三国志』倭人伝に付け加えることはありません、ということを書いていない。「邪馬臺國」と言っている場所と「邪馬壹國」と言っている場所とは同じ場所である。片方『三国志』の「邪馬一國」は七万戸の政治地名であり、『後漢書』の「邪馬台國」は大倭王の居る所となる。中心地名という形で書いてある。の中の「ヤマ」といわれる所が有りまして、その周辺の低湿地というか平らである所が「ダイ」に当たる所となる。

総里程の最後が不弥国、室見川の下流か、博多湾岸となる。その南が邪馬一國である。邪馬一國は博多湾岸とその周辺となる。邪馬台国はその周辺は入らない。博多湾岸の「ヤマ」を取りまく低湿地である「ダイ」となる。「邪馬台国」は「邪馬壹国」のなか、邪馬（ヤマ）を取りまくごく狭い範囲を言っていることになる。

そうなりますとヤマダイという地名が書いてあるのは、『後漢書』の五世紀の地名ですが、五世紀に発生したとは限らない。（元は）権力者が付けるわけではない。ヤマダイという地名が載っているのは、五世紀の『後漢書』である。書いたのは五世紀であるけれども、書いてある対象は、後漢（西暦年々）である。後漢においても、「邪馬臺（ヤマタイ）」と呼ばれていた可能性はある。

これも、とんだ所へ飛び火する。

簡単に言うところの『東日流外三郡誌』では、安日彦、長髓彦は、筑紫の日向の賊に追われてやってきた。つまり私は博多湾から「天孫降臨」という事件により、「九州筑紫を追われて津軽へやって来た。」と理解している。

この解釈は、尊敬する秋田孝季の理解とは少し違っている。彼は「神武天皇に追われて安日彦、長髓彦は津軽へやって来た。」と理解している。彼の理解とは違うけれども、それは今回の問題には直接関係がない。けれども、たえず「ヤマタイ」が出てくる。『三郡誌』も「ヤマタイ」と読んでいる。ときたま「ヤマイチ」も出てくるがこれは少数派である。これは何か。天孫降臨の時は「邪馬壹国」と読んだはずはない。この呼び名は、壹与の西晋に対するおべんちゃらであるから。そうすると、「ヤマタイ」はあった可能性が高い。そういう面白い問題もある。

先ほどの『隋書倭国伝』の倭国は、どういう意味で国号を付けた

かは、本当は名乗った御本人の解説を聞かなければ分かりませんが、「大倭（タイイ）」という意味で国号を名乗った場合、中国式の一語で表す形の国号として「倭」にしたのではないか。そう考えています。「倭」という文字そのものは、謙遜する意味の弱いと「倭国」を名乗ってはいるが、伝統ある「大倭（タイイ）」であると称している。自分の国号として名乗ったのではないか。

唐の初めに作られた『隋書』では「日の出ずる天子」という言葉も収録し、「倭国」という言葉もそのまま使っている。ところが『旧唐書』では、「日の出ずる天子」もなくなるし、「倭」という言葉も無くなって倭に戻っている。

なぜかというところ、『隋書』と『旧唐書』の間に、白村江の戦いがある。その「日の出ずる天子」は完敗した。「日の出ずる天子」に唐は完勝した。自分で「日の出ずる天子」と勝手に名乗った相手の称号は認める必要はない。天子だから勝手に作った「倭国」という国号も認める必要もない。それで昔から中国が呼んできた筑紫の「倭」に戻した。

ただし注目すべきは表記は採用しなかったが、中国の歴史書は前代の歴史書を前提として書かれているという、隋書を受けて、『旧唐書』を書くという中国伝来の手法は全く変わっていない。

その証拠に『旧唐書』に『隋書』の文句をそのまま受け継いでいる。有名な「東西三月行、南北三月行」をそのまま『旧唐書』は受け継いでいる。これは当然天子の直轄領ではなくて、西は九州から、東は樺太ぐらいと思うのですが、それを「日の出ずる天子」の領域、威光の及ぶ範囲と称した。南北は、韓国から沖繩まで、場合によっては台湾も入るかも知れませんが、海の支配領域は私である。大陸はあなたに上げるよ、こちらは私の領域である。と「日の出ずる天子」は言っている。

『旧唐書』は、『隋書』の特色ある文言そのままに記録し、そこに天子の直轄領としての「九州」島を表す問題の文言、「四面小島皆附属」を付け加えた。講演のたびに多くの人から同じような質問を受けていたが、「東西五月行、南北三月行」との関係から考えても、小島が四面に付属しているという表現は、言えないことはないが日本列島全体としてはちよつとふさわしくない。ここは私も疑問をもっていて保留していたところでした。しかしもう一度検討すると、『隋書』にない、新しい情報を加え、天子の直轄領を示す言葉として「四面小島皆附属焉」を入れた。現在そのように考えています。

『隋書』倭国伝

倭國在百濟新羅東南水陸三千里於大海之中依山島而居魏時譯通中國三十餘國皆自稱王夷人不知里數但計以日其國境東西五月行南北三月行各至
於海其地勢東高西下都於邪靡堆則魏志所謂邪馬臺者也古云去樂浪郡境及帶方
郡並一萬二千里在會稽之東與儋耳相近

『旧唐書』倭国伝

倭國者古倭奴國也去京師一萬四千里在新羅東南大海中依山島而居東西五月行南
北三月行世與中國通其國居無城郭以木爲柵以草爲屋四面小島五十餘國皆附属焉

1 この中で特定の文字については、文字鏡明朝体 true type を使用させて頂いています。

使用文字 倭 念 鑰

(文字鏡研究会ライセンス番号 VPKFW-P1049)

2 七ページ後半から八ページ前半「青海原 ふりさけみれば 春日なる・・・」に、関連する記述が抜けておりました。10月1日追加。

古代史再発見『独創古代 —未来への視点』

2004年10月 1日 第2刷発行

著 者 古田武彦
編 集 古田史学の会
発行人 横田幸男

東大阪市寺前町2-3-16
TEL & FAX 06-6727-0408
郵便番号 577-0845

※本書の本文書体は、ヒラギノ明朝体を使用しております。ヒラギノ明朝体で表示出来なかった文字については、文字鏡明朝体 true type を使用しております。